

糸島市立

伊都国歴史博物館

紀 要

第15号



三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝について

—三雲下西遺跡 1261 番地 2 次調査の調査成果から—…………… 江崎 靖隆 (1)

糸島地域における井戸の時期的変遷と画期 …………… 平尾 和久 (19)

平原遺跡出土の異形金属器

—3号墓および表土採集金属器—

比佐陽一郎

松園 菜穂

岡部 裕俊 (29)

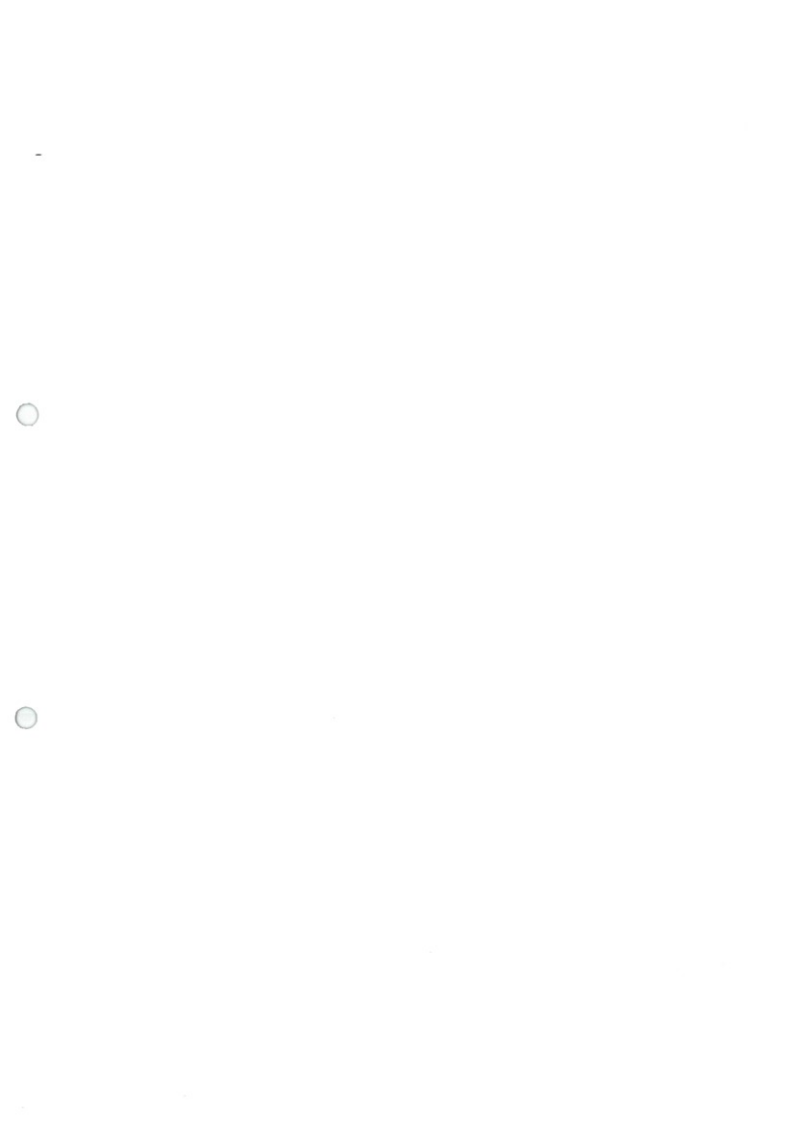
壱岐島の横穴式石室と九州

—複室構造横穴式石室の分布から—

角 浩行 (33)

2020







序

本書は昨年5月に元号が変わり、「令和」となって初めての紀要となります。また、当館は昨年10月に開館15周年を迎えました。このような記念すべき年となった今年度であります。現在、新型コロナウイルスの感染が全世界に広がり、国内でも徐々に感染者が増えつつあります。このような中、当博物館も感染拡大防止の観点から臨時休館としております。これ以上、感染が拡大しないよう祈るばかりです。

このような状況ではありますが、今年度も博物館の紀要を刊行することが出来ました。本書には4編の論考を掲載しておりますが、市内の遺跡の発掘調査成果を基にした論考が3編、本年度の特別展に関連する論考が1編、対象の時代としては弥生時代から近世に渡っております。

博物館事業の柱の一つは言うまでもなく調査・研究事業ですが、当館においてはまだまだ立ち遅れた感があります。しかしながら、文化財保護担当職員並びに他の機関の方の協力を受けながらではありますが、本書が刊行できたことは、その責をわずかではあります。果たせたのではないかと考えております。今後は調査・研究事業がわずかずつでも進むよう努めて参りたいと考えておりますので、皆さまのご指導、ご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、本書に掲載しております論考の執筆にあたり、ご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

令和2年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館

館長 角 浩 行



三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝について

—三雲下西遺跡1261番地2次調査の調査成果から—

江崎 靖隆（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

三雲・井原遺跡は、糸島地域における中核的大規模集落である。弥生時代初頭に支石墓を中心とする集落形成が始まり、弥生時代中期後半から集落規模を拡大、厚葬墓の出現や多器種の楽浪系土器の出土など『魏志倭人伝』の記載を裏付ける遺構・遺物が存在し、その遺跡の重要性から、平成29年10月に国指定史跡となった。

本稿で取り扱う三雲・井原遺跡下西地区は、平成14年度から行われた重要遺跡確認調査により、弥生時代中期末に掘削された方形環溝が部分的に確認され、首長居館の可能性から注目を集めた。しかし、この区画溝の周辺は、住宅地であるため、区画溝の延長方向や内部構造を知るための調査が困難である。

このような中、平成22年度に下西地区1261番地に下水道敷設が計画され、それに伴う発掘調査が行われた。非常に狭い範囲で行われたこの調査では、下西地区534番地で検出した南北方向の区画溝が続くことを確認した。

今回は、下西地区1261番地2次調査の成果について報告し、そこから推測される方形環溝の復元と歴史的な位置付けを行ったうえで、方形環溝について、予察的な考察を行いたい。

2. 下西地区1261番地2次調査の成果

下西地区1261番地2次調査は、前述したように、下水道敷設に伴う調査であったため、幅1.0m、長さ40mの細長いトレンチを設定し、調査区東側はマンホールが設置されるため、幅2.7m、長さ8.5mの調査区を設定した。このため、トレンチは溝で区切られた方形区画の内部を斜めに横断する形となっている。調査面積は、63㎡である。

主な遺構としては、弥生時代の東側区画溝や竪穴式住居6軒（布留期）、土坑（中世）、ピット等を検出し、方形環溝の東側部分を確定することができたが、弥生時代の内部施設を確認すること

はできなかった。なお、本稿では紙面の都合上、東側区画溝を中心とした報告とした。

(1) 東側区画溝（南北方向）

調査区東端で検出した東側区画溝である。下西地区534番地の北側区画溝（東西方向）から直角に曲がり、東側区画溝（南北方向）の延長線上で確認でき、想定通りである。

東側区画溝は、長さ3.3m分を検出し、中央に第4トレンチを設定した。調査の結果、幅2.9～3.2m、深さ1.0mを測り、断面形態が逆台形状となる。床面の標高は36.860mである。

土層は、大きく4～10層の堆積層と1～3層の明確な掘り直し層に分かれ、一度、区画溝は埋没した後に掘り直されていることが分かる。これは、前回の調査（下西地区534番地）でも確認されており、基本的な土層も同じである。

まず、掘り直し前である当初の区画溝の土層は、茶褐色土層（4～8層）と最下層である砂質土層（9、10層）に区分できる。10層はほぼ川砂であることから、ある程度の水の流れを想定できるが、土器がほとんど含まれていない。4～8層は、弥生時代中期後半～後期前半の土器が含まれるが、細片が多い。

掘り直しの区画溝は、断面が漏斗状の形で、幅1.92m、深さ0.84mを測る。下西地区534番地の第3トレンチでは、幅2.48m、深さ0.96mであることから、いずれのトレンチでも当初の区画溝と比べて、幅が小さくなり、深さが浅くなる。

1～3層の掘り直し層は、礫が少なく、完形に近い土器が大量に出土する1、2層と土器が少なく、礫が非常に多い3層に大きく分かれている。

1、2層の土器は、壺、甕、鉢、高杯、器台、支脚など器種が比較的良好にそろっているが、壺と甕が最も多く、高杯、鉢器台は少ない。完形の土器が多く、3層が埋まった後に、弥生時代後期初頭～前半を中心に、弥生時代後期後半までの土器が、区画溝の廃絶に伴い投げ込まれている状況である。

この掘り直し及び土器廃棄は、東側区画溝のみで確認でき、北側区画溝では確認することができないため、東側を意識して行われていると考えられる。

(2) 竪穴式住居

竪穴式住居は6軒確認されているが、幅1.0mの細長いトレンチであることや住居同士の切り合いもあって、竪穴式住居であるかどうか判断が難しい。出土土器は布留期であり、方形環溝と同時期ではない。下西地区では、弥生時代終末期～古墳時代前期後半までの住居が密集しており、方形環溝を破壊していることから、この頃には方形区画は意識されていないことになる。

(3) 土坑、ピット等

確認できている土坑は、p18、21、26、28、55の5基であり、建物の柱穴と考えられるが、出土土器は全て中世である。ピットも多数検出されているが、土器の出土は少なく、時期が判断できないものが多い。

(4) 区画溝の出土土器(第5～9図)

1～17は、区画溝の掘り直し(1、2層)から出土した土器で、土器1～14の各番号は、第2図の土器出土状況にそれぞれ対応する。

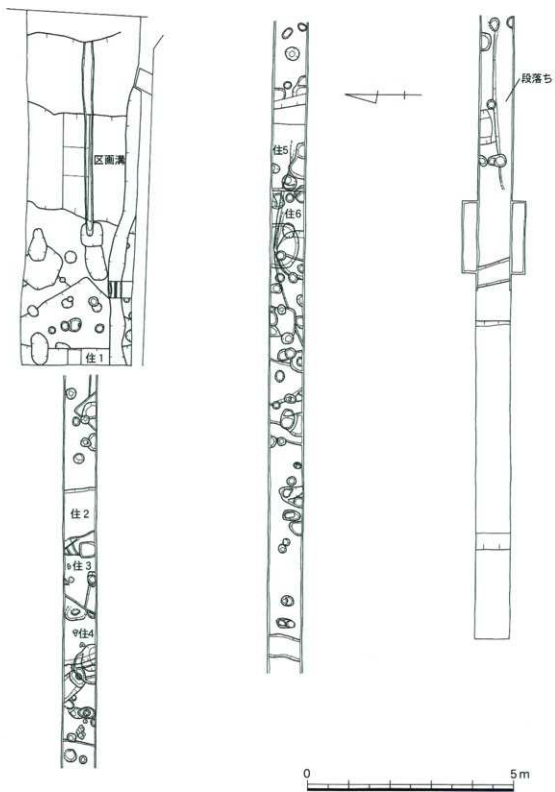
1は、壺の口縁部片で、素口縁である。2は、甕の底部片で、平底。3は、鋤先口縁の高坏の坏部。丹塗磨研であるが、外面には縦方向の刷毛目が残る。弥生時代中期後半～末である。

4は、器台で口縁内面に横方向の刷毛目を施す。5は、くの字状の口縁をもつ甕で、体部外面には縦方向の刷毛目を施す。弥生時代後期前半。6は、壺の胴下部部分で、外面は丹塗磨研である。外面には縦方向の刷毛目が残る。7は、壺の胴下部部分である。平底で、外面に縦方向の刷毛目がわずかに残る。8は、甕の底部片。9は、壺の胴部片で、底部穿孔している。10は、くの字口縁をもつ甕で、平底である。内外面共に刷毛目を施す。弥生時代後期前半。11は、くの字口縁となる甕で、外面には二次焼成痕がある。胴部外面は縦方向の刷毛目を施す。弥生時代後期前半。12は、短頸壺で、胴部穿孔している。弥生時代後期初頭。13は、甕の底部片で、平底。外面は縦方向の刷毛目を施す。14は、鋤先口縁壺の上半部の破片で、鋤先口縁がL

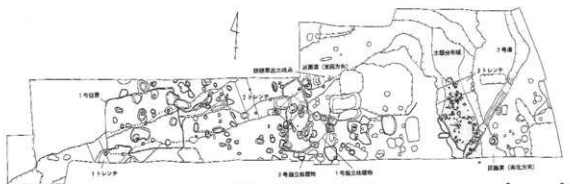
字状となる。弥生時代中期末～後期初頭。15は、鋤先口縁が直立気味となった鉢で、底部穿孔している。外面胴部の縦方向の刷毛目が残る。弥生時代後期初頭～前半。16は、やや内傾するL字状口縁をもつ甕で、胴上半部のみの残存である。内外面共に刷毛目が残る。17は、くの字口縁をもつ甕で、胴上位のみ残存する。外面に縦方向の刷毛目を施す。

18～55までは、区画溝の4～10層から出土した土器である。1～3層出土土器と比べて、細片が多い。18は、くの字口縁をもつ甕で、口縁部のみ残存する。19は、逆L字状の口縁をもつ甕である。外面に縦方向の刷毛目を施す。20は、素口縁の壺で、21の壺底部片と同一個体と考えられる。22は、くの字口縁の鉢で、胴部外面は縦方向の刷毛目、胴部内面は板ナデを施す。弥生時代後期前半。23～26は、くの字口縁甕の胴上部片である。外面に縦方向の刷毛目を残す。27は逆L字状口縁をもつ小形甕で、胴上部のみ残存。28～33は、甕の口縁部片で、くの字状になるものが多い。32は、二次焼成痕が外面に残る。34～40は、甕の底部片で、外面は縦方向の刷毛目を残す。41は、袋状口縁壺の口縁部片であるが、丹塗りではない。42は複合口縁壺の口縁部片である。43は素口縁壺の口縁部片で、内外ともに刷毛目がわずかに残る。44～46は、壺の底部片で、外面には縦方向の刷毛目を施す。すべて平底である。47は壺の胴下半部分のみの残存。平底で、外面には縦方向の刷毛目を施す。外面丹塗りである。48は、逆L字状口縁を持つ鉢で、口縁直下に三角突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りである。弥生時代後期初頭。49は高杯の脚部片で、外面丹塗りである。50も高杯の脚部片で、外面調整は板ナデである。51は、器台で下半部のみの残存である。外面には指頭圧痕が残る。52、53は、器台の脚部片。54、55は手づくね土器で、鉢形である。54は完形である。

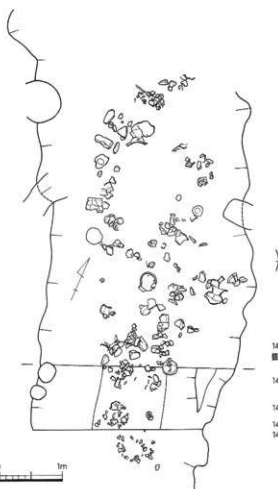
第9図の55～60は、参考資料として、下西地区534番地における東側区画溝(南北方向)の掘り直し部分から出土した土器群から、埋没時期に近い土器を掲載したものである。59、60は弥生時代後期前半～中ごろで、他は弥生時代後期後半であり、この頃の埋没と考えてよい。



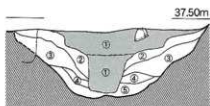
第1図 下西地区1261番地2次調査全体図 (1/100)



第1図 下西地区534番地全体図 (1/200)



0 1m



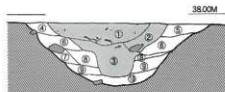
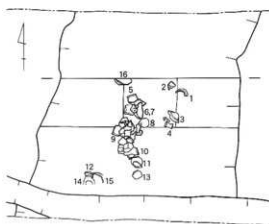
(3トレンチ)

- ①暗褐色粘質土 (後期後半円形土器片含む)
- ②暗褐色粘質土
- ③暗褐色土 (灰含む)

- ④明灰褐色土
- ⑤砂礫土
- ⑥灰褐色砂質土

地山: 暗砂質土、砂礫土

下西地区534番地土器出土状況および第3トレンチ土層断面実測図 (1/60)



14年度調査①、⑦対応
掘り直し

14年度調査②層と対応

14年度調査③層と対応

14年度調査④層と対応

14年度調査⑤層と対応

14年度調査⑥層と対応

14年度調査⑦層と対応

- ①灰茶褐色粘質土層 (礫・土器共に非常に多い、発生中～後期後半)
- ②明灰褐色土層 (礫を大量多く含む)
- ③暗灰茶色土層 (礫を非常に多く含む、①層に比して土器の出土は少ない)
- ④茶褐色粘質土層
- ⑤茶褐色土層 (区層と比べて礫が非常に多い)
- ⑥黄茶色砂質土層 (礫の混入が少ない)
- ⑦暗黄茶色砂質土層 (礫の混入が少ない)
- ⑧暗黄茶色土層 (礫が非常に少ない)
- ⑨明褐色砂質土層 (礫が多い)
- ⑩暗褐色砂質土層 (礫土は、川砂のような細かい)

下西地区1261番地2次調査トレンチ土層断面実測図 (1/60)



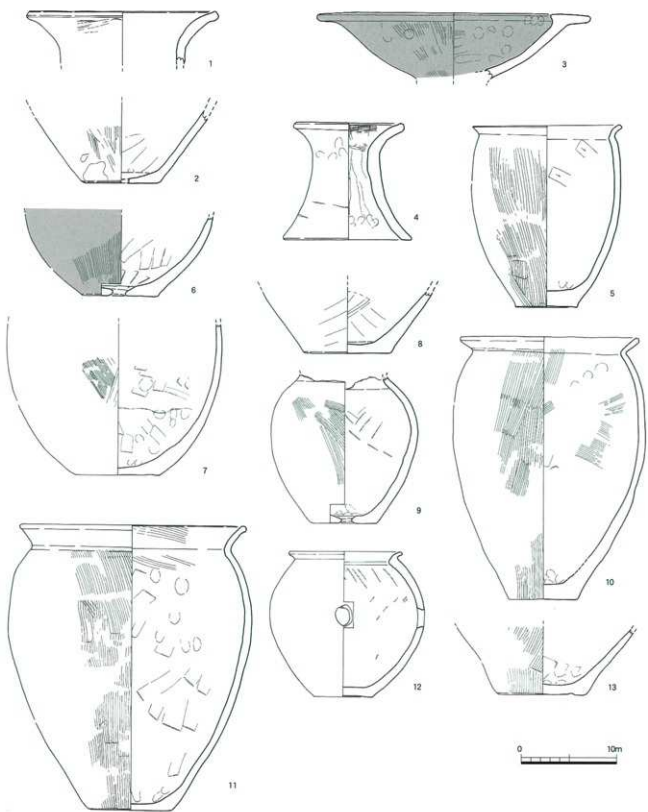
- ①暗褐色粘質土
- ②暗褐色粘質土 (土器含む)
- ③暗褐色粘質土 (黄色砂質土ブロック混)
- ④黒褐色粘質土
- ⑤暗黄褐色土 (土器含む)
- ⑥暗黄褐色土 (土器、礫含む)
- ⑦暗褐色粘質土
- ⑧暗褐色砂質土
- ⑨灰褐色砂質土 (砂質ブロック多く含む)

- ①暗褐色砂質土 (黒褐色ブロック混)
- ②暗褐色砂質土 (土器・灰含む)
- ③暗褐色砂質土
- ④暗褐色砂質土 (礫含む)
- ⑤暗褐色土 (土器含む)
- ⑥暗黄褐色砂土
- ⑦暗黄褐色粘砂土
- ⑧暗褐色粘砂土
- ⑨暗褐色粘砂土

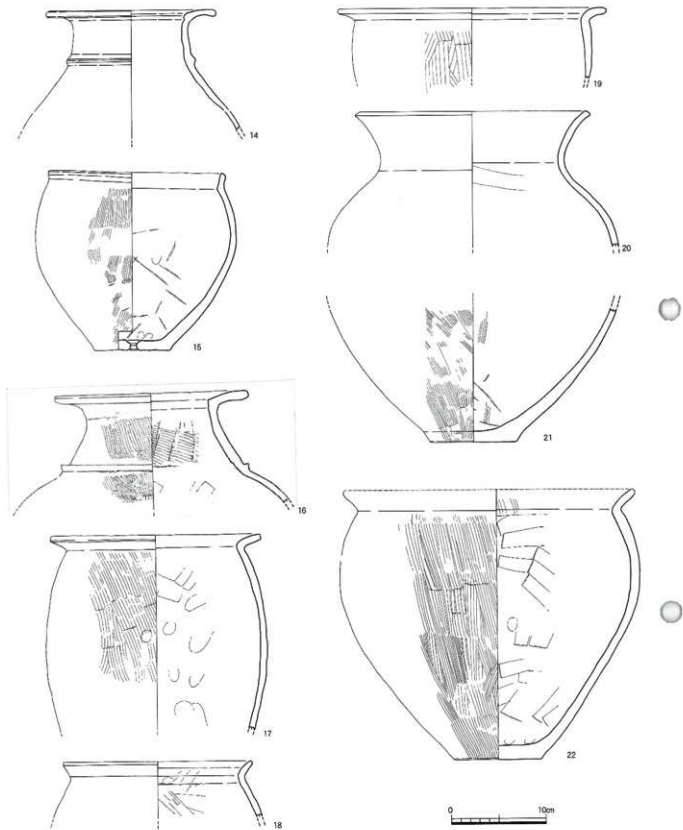
地山: 黄褐色土、砂礫土

下西地区534番地第2トレンチ土層断面実測図 (1/60)

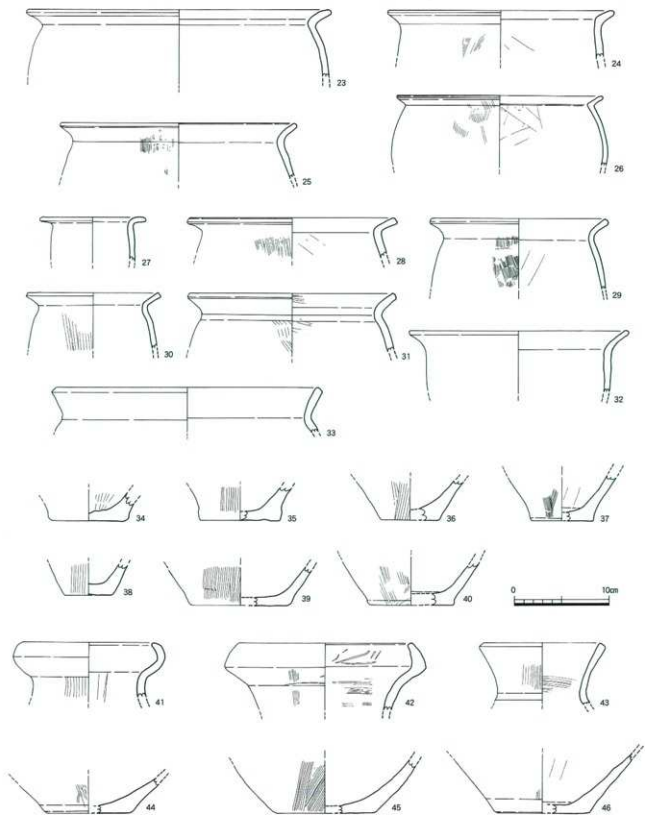
第2図 下西地区534番地、1261番地2次調査区画溝土層断面実測図 (1/200、1/60)



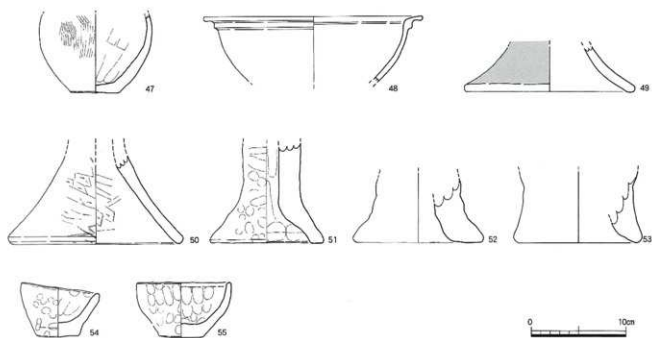
第3图 下西地区1261番地2次調査区画溝出土土器実測图①(1/4)



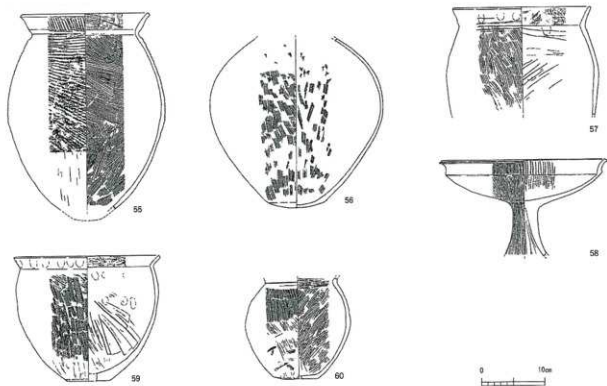
第4図 下西地区1261番地2次調査区画溝出土土器実測図② (1/4)



第5图 下西地区1261番地 2次調査区画溝出土土器実測図③ (1/4)



第6图 下西地区1261番地 2次調査区画溝出土土器実測図④ (1/4)



第7图 下西地区534番地区画溝出土土器実測図 (1/6)

3. 下西地区方形環溝の復元

平成14年度から行われた一連の調査により、北側区画溝（東西方向）で、北東コーナーと北西コーナーが確認できたことから、42～44mの方形区画が想定されたところであるが、北西コーナーから南への復元ラインについては、屋敷1261番地1次調査で確認された2号溝が可能性として指摘されている。しかしながら、出土土器から、弥生時代中期と考えられるが、断面形態、埋土、床面レベル等で区画溝と若干異なる部分があるため、一連のものかは判断に迷うところである（岡部、牟田2006）。

今回の下西地区1261番地2次調査により、東側区画溝が南へと続くことが明らかとなったが、区画溝は下西地区534番地の直線ラインから、少し内側へと向かっていることから、屈曲部つまり南東コーナーに近い部分である可能性が高い。仮にここで屈曲するとして、推定ラインを西へと延長すると、屋敷地区495番地と1261番地1次調査にあたる。

屋敷地区495番地の調査では、調査区の南東側にし字に屈曲する大溝が確認されているが、本報告では特に触れられていない。そこで、調査図面を確認したところ、中世の土師皿が出土しているが、肝心の出土標高の記載がない。この大溝は中世のピットが多く切り込んでおり、そこから出土した可能性もあるため、大溝出土土器の再確認を行った。結論としては、この大溝から出土した土器は、細片が多く、中世の土器はベルト内に1点あるが、土層図には中世ピットがあるため、ここから出土したものとする。これ以外の土器は、第8図に図示しているが、1～6のうち4が弥生時代後期後半、それ以外は弥生時代中期後半の土器で、この大溝が暗褐色土層であることから、弥生時代の可能性が高い。

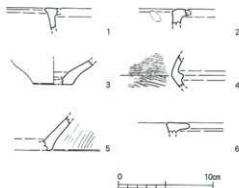
一方、屋敷地区1261番地1次調査では、1～3号の溝が検出されており、1号溝が、復元延長ライン上にあるが、本報告のとおり中世である。ところが、先ほどの屋敷地区495番地における大溝の底面標高は36.894mであるのに対して、屋敷地区1261番地1次調査の1号溝付近の遺構面標高は35.735mであり、既に大溝が削平を受け消失している可能性があり、屋敷地区495番地における大溝を区画溝の候補とすることができる。

以上の検討から、断定はできないが、北西側コーナーの延長ラインと南西側コーナーの延長ラインが重なる屋敷495番地の大溝は、南西側コーナーである可能性があり、そこから推定される方形区画は、第10図で示すような内寸で東西45m×南北38mのやや長方形を呈することとなり、推定面積は1,710m²である。

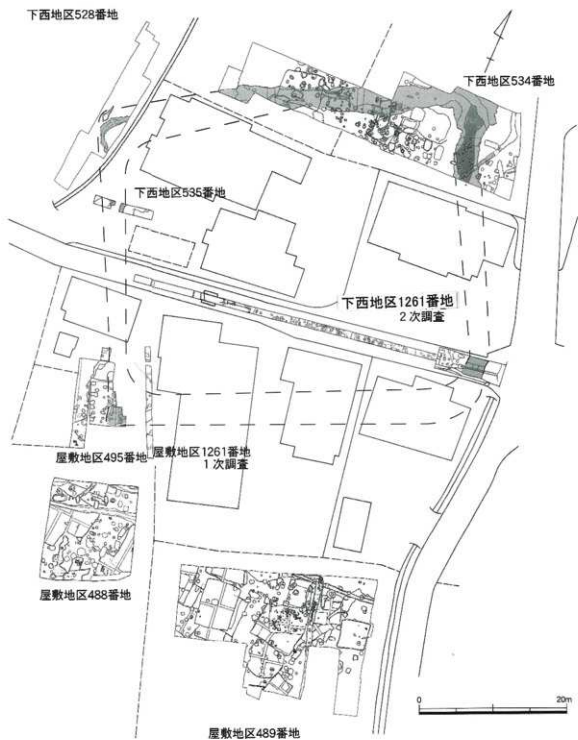
区画溝の床面標高を比較すると、北に向かって低くなり、傾斜しており、最も低いところは北西コーナー部分である。区画溝の断面形は、北側と東側で異なっており、前者は防御性を有するV字形、後者は逆台形である。さらに、前述したように、東側区画溝のみ掘り直し、意図的な土器廃棄が行われており、最終埋没段階の廃絶祭祀と見られる。

周辺の調査では、方形環溝の東側にあたる中川屋敷地区478-1、479-1、537-2番地の調査で、落ち込みが存在し、弥生時代中期後半から埋没し始めるが、その層を切り込む形で、弥生時代後期初頭と弥生時代後期後葉の溝（SD10、13）が確認されている。両溝は、方形環溝と並行しており、居館の外側を圍繞する区画溝であろうか。

方形環溝の南側にあたる屋敷地区488、489、500番地の調査では、弥生時代終末期以降の住居跡が広がるが、方形環溝と同時期の遺構が見当たらない。このことから、下西地区方形環溝は、独立的な存在であり、この圍繞された空間は、弥生時代中期後半～後期後半まで長期間維持された特殊な空間である。三雲南小路遺跡から北に300mの地点に位置し、王墓の出現と同時期に成立していることから、首長居館であった可能性があると考えられるが、今後の方形環溝内部の調査に期待するところである。



第8図 屋敷地区495番地大溝出土土器実測図(1/4)



第9図 下西地区方形環全体図 (1/500)

4. 下西地区方形環溝の歴史的位置付け

下西地区方形環溝は、三雲南小路遺跡の出現と同時に成立していることや空間的な隔絶性から首長居館の可能性を指摘したところであるが、この方形環溝は、弥生時代中期後半に掘削されていることから、北部九州において最古の事例である。また、内部は不明であるものの、その内法面積は1,710㎡と弥生時代後期後半以降に現れる方形環溝を除くと最大規模である。

下西地区方形環溝がある三雲・井原遺跡は、弥生時代初頭に支石墓を中心とした集落形成が始まるが、糸島地域の中核的大規模集落となるのは、集落規模が大きく拡大する弥生時代中期後半からであり、王墓や方形環溝の出現と重なる。集落構造は、大溝を介して、北の居住域と南の墓域が設定されるが、この大溝は集落を圍繞するものではない。王墓である三雲南小路遺跡および井原遺跡は、集落の南西側に一般墓域とは別に選地し、方形環溝は、この三雲南小路遺跡から北に約300mの地点である集落の北西側に選地していることから、弥生時代中期後半の集落拡大に伴い、集落の西側が、首長層の特別区画として設定されていると考えられる。

一方、弥生時代後期初頭になると、比恵・那珂遺跡群でも、集落研究史としても有名な1号環溝が出現する。内法面積1,054㎡の内部には、竪穴式住居5軒、井戸2基に加えて、超大型建物（150㎡以上？）が想定されており、竪穴式住居群から超大型建物への変化や前段階の甕棺墓域を破壊して造成されていることから、「公権力」の発生を示す可能性があるとの指摘がある（久住2009）。この超大型建物の形式は不明であるが、久保園タイプのような基本的に100㎡を超える超大型建物でも、必ずしも方形環溝が伴うわけではなく、集落の中核域ではない例もある中で、1号環溝の超大型建物は、中核域に位置し、方形環溝を持っている点で極めて稀有な事例である。

また、須玖坂本遺跡B地点の2、3次調査では、弥生時代後期前半の方形環溝と目される溝が検出されており、須玖遺跡群でも条溝によって、区切られた空間内に方形環溝が存在する可能性がある。

これらの遺跡は、三雲・井原遺跡が約60ha、比恵・那珂遺跡群・須玖遺跡群が100ha以上と中

核的大規模集落であり、三雲南小路遺跡や須玖岡本遺跡の「王墓」の存在から、方形環溝は、糸島、福岡地域の首長層により、導入されたものと考えられるが、この方形環溝の起源については、武末純一氏は、楽浪郡や・帯方郡の郡地や県域あるいは三韓の国邑に求めており、京畿道漢沙里遺跡を好例とし、久住猛雄氏は、周船寺遺跡群7次調査や一の町遺跡、比恵遺跡群などの調査例から、それ以前の直線的・方形志向の空間が発展し、顕在化する形で方形環溝が成立したとしている（武末2012、久住2003）。

このことから、前段階から、集落内部における建物配置の方形志向の素地が形成された上で、首長層の出現を契機に、外部からの方形環溝の導入された可能性を考えておきたい。

その後、三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝は、弥生時代後期後半には埋没し、継続する新たな方形環溝は認められないが、弥生時代終末期から集落レイアウトに変化が生じており、弥生期の集落域に端山古墳（4世紀前半）、薬山古墳（4世紀中頃～後半）の前方後円墳が築かれている。したがって、方形環溝の終焉後も集落自体は継続しており、拠点集落としての性格は維持されていると見られる。

一方、比恵・那珂遺跡群では、弥生時代後期中頃の3号環溝（内法面積1,287㎡）に引き続き、弥生時代終末には、道路の建設により、集落レイアウトが変わり、2号環溝（内法面積4,020㎡）が成立する。それは、玄海灘沿岸地域で最大規模の方形環溝であり、古墳時代初頭に出現する那珂八幡古墳との関係が目目されているほか、継続的な方形環溝の造成から、古墳時代首長居館の先駆的なあり方としての重要性が指摘されている。集落自体は、古墳時代前期中頃まで集落規模と遺構分布が保持され、古墳時代前期末に遺構が激減するようである（久住2003、2018）。

さて、武末純一氏は、方形環溝について、弥生時代の環溝集落内部の方形環溝が、外へ独立して、古墳時代の首長居館が成立したとする発展段階「円形の中の方（A類型）→円形の外の方形（B類型）→円形のない方形（C類型）」を説明し、比恵・那珂遺跡群の方形環溝をA類型、須玖遺跡群をC類型の「都市」として評価し、三雲・井原遺跡の方形環溝もA類型として評価している

ようである(武末1991, 2006)。一方、久住猛雄氏は、比恵・那珂遺跡群について、集落全体を囲む環濠は存在せず、直線的な条溝によって区画され、その条溝の東西に井戸や建物が展開していることから、須玖遺跡群と同じ「都市」であり、C類型としている(久住2003)。

筆者は、三雲・井原遺跡においても集落全体を圍繞するような環濠は存在せず、方形環溝の出現当初から特別区画として独立性が高いことや王墓の出現と同時期に方形環溝が成立していることから、「都市」であるかどうかは別としてもC類型と考えておきたい。

このように、比恵・那珂遺跡群や三雲・井原遺跡では、方形環溝の埋没時期と集落の終焉時期とが、必ずしも一致しているわけではなく、拠点集落として継続している可能性が高い。

また、両遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代初頭には、集落構造に大きな変化が生じ、博多湾沿岸に新たな対外交渉拠点が成立するが、玄海灘沿岸地域～山陰地域～近畿地域を結ぶ新しい交流ネットワークが形成され、新たな秩序が反映されたものと考えられる。

この頃、糸島地域では、40面もの銅鏡を有する平原遺跡が出現し、玉造り(潤地頭給遺跡)や製塩(今山遺跡)など新たな生産と流通が展開する局面であり、三雲・井原遺跡における集落構造の変化は、当時の政治動向を反映したものと考えられる。

5. おわりに

本稿では、三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝の復元や歴史的な位置づけについて検討を行った。下西地区方形環溝は、調査制限により内部構造や陸橋部の有無が不明であり、今後の調査に期待したい。

また、最後に「有明型」を除く、北部九州の方形環溝の一覧表及び遺構図を参考として掲載している。今後の研究の一助となれば幸いです。

【参考文献】

(論文等)

- 石野博樹1990「1. 総論」『古墳時代の研究 2集落と森民居跡』越山園
 藤原宏行2002「3世紀の北部九州—佐賀平野、志岐陸遺跡群を中心に—」『3世紀のクニゴエ—古代の生産と工芸』考古学研究会
 北島久純2012「山口における古墳出現期の首長居館—下東遺跡の方形環溝と朝川墳墓群—」『古文化談議』第68集 九州古文化研究会
 久住猛雄2000「筑国の遺跡—須玖、同本遺跡群と比恵、那珂遺跡群—」『考古学から見た佐賀県と藤』九州考古学会・福岡考古学会第4回合同考古学会
 久住猛雄2003「北部九州における弥生時代の特定環状区画と大型建物の展開」『日本考古学協会2003年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
 久住猛雄2009「比恵、那珂遺跡群—弥生時代後期の集落動態を中心として—」『集落文化研究発表会2009資料集』
 久住猛雄2018「筑国の『都市』～比恵、那珂遺跡群～」『古墳時代における都市化の萌芽的比較研究—大塚上町発掘地、博多湾沖、赤良地区—』資料集(公財)大塚市博物館信玄大塚文化財研究所
 久住猛雄2019「筑国西部—中部(糸島、早良、福岡平野周辺、糟屋、日田市(北宇))の弥生時代終末—古墳時代前期の集落、集落動態、首長居館、交易拠点」『集落と古墳の動態Ⅱ—古墳時代前期前—古墳時代中期—追加資料』九州前方法学研究会
 武末純一1991「弥生時代のわたり」『弥生文化』大塚市立弥生文化博物館
 武末純一2006「3世紀のツクシの住居と集落」『群馬台風の時代のツクシとヤマト』学生社
 武末純一2012「弥生・古墳時代集落構造論序論」『古墳時代の研究—弥生、古墳時代および無文土器—三國時代—』日韓考古学研究会
 寺沢真1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
 森本幹彦2011「玄海灘空間の変化、集落フォーメーションの展開」『弥生時代の考古学4墳時代への動向』同成社(報告書等)
 岡部裕信、牟田幸代子編2006「三雲・井原遺跡V—歴史、下西地区の調査—」前都市教育委員会
 藤原正敏1993「夜須中学校遺跡」夜須町文化財調査報告書第25集 夜須町教育委員会
 佐々木勝彦編1985『東小田遺跡—福岡市夜須町所存遺跡群—七飯遺跡D区の調査』福岡県文化財調査報告書第70集 福岡県教育委員会
 新尾編1996「福岡、水ヶ元遺跡—九州自動車道福岡インターチェンジ系築物撤去工所用地の調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集 福岡市教育委員会
 森崎敬男2005「八女市南部地区馬渡遺跡群(藤原朝野)の埋蔵文化財調査報告書1」福岡県八女市南部地区所在遺跡の調査報告書 八女市文化財調査報告書第71集 八女市教育委員会
 大塚恵治編2012『深田遺跡(2)〜4次調査』福岡県八女市藤田・緒玉所在遺跡の調査報告書 八女市文化財調査報告書第93集 八女市教育委員会
 上村佳典編『屏風原遺跡』北九州市文化財調査報告書第23集北九州市教育委員会
 藤原道文2002「太平寺、在野地区遺跡群13 殿城川遺跡第7次調査」大分市の文化財第82集 大分市教育委員会
 水原道雄2005「市ノ上東原遺跡」発掘調査報告書報告書
 久留米市文化財調査報告書第208集 久留米市教育委員会
 木村達英2014「みやこ町内遺跡群 福岡県京都郡みやこ町早川大塚地区所在遺跡の調査(遺構編)」みやこ町文化財調査報告書第11集
 末永秀雲、木村達英2017「みやこ町内遺跡群 福岡県京都郡みやこ町早川大塚地区所在遺跡の調査(遺物編)」みやこ町文化財調査報告書第15集
 熊野博1998「藤ヶ原遺跡 福岡県上郡大下村大字下原原所在遺跡の調査」

総国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集

岡田謙2013『延永ヤヨミ遺跡Ⅰ-V区-1・2・3区-1』 国道直方橋線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告1 福岡県文化財調査報告第238集

城門義典2014『延永ヤヨミ遺跡Ⅱ区2 福岡県行橋市大字延永。吉国所在遺跡の調査』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告第11集

城門義典2015『延永ヤヨミ遺跡Ⅲ区Ⅱ（第1分冊） 福岡県行橋市大字延永。吉国所在遺跡の調査』一般国道201号行橋インター関係埋蔵文化財調査報告第5集

阿野正典・柳本照男2009『立明寺地区遺跡B地点（仮称）イオン筑紫野S C開業に伴う発掘調査報告書 株式会社島田組

塩濱浩之2017『F寺原七社遺跡 胎着組い子育て事業（産前産後）に伴う埋蔵文化財報告書』上毛町文化財調査報告書第22集 上毛町教育委員会

丸尾弘介2017『下東遺跡3』山口市埋蔵文化財調査報告第119集 山口市教育委員会

吉武学1997『野多目入遺跡4-野多目入遺跡群第4次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集 福岡市教育委員会

八尋実1996『右原祇園町遺跡』神崎町文化財調査報告書第52集 神崎町教育委員会

二宮忠司1992『福岡市西区国史跡野方遺跡環境整備報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第313集 福岡市教育委員会

井上邦弘1984『穴江・塚田遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第4集 嘉穂町教育委員会

荒牧宏行1999『橋本一丁田遺跡・女原遺跡-橋本一丁田遺跡群第3次調査-』女原遺跡群第5次調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第616集 福岡市教育委員会

久住猛雄2014『原原3-原原遺跡第4次発掘調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1224集 福岡市教育委員会

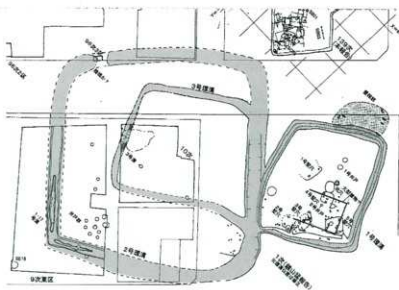
佐賀県教育委員会 2015『佐賀県文化財調査報告書207：吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会

番号	遺跡名	場所	遺構名	内法面積 (㎡)	内部・外部施設	時期
1	三雲・井原遺跡下西地区	福岡県糸島市	方形環溝	1,710	—	弥生中期末～後期後半
2	比恵・那珂遺跡群	福岡県福岡市	1号環溝	1,054	超大型建物1 (187㎡以上) 竪穴式住居5、井戸2、櫛列	弥生後期初頭～前半
			3号環溝	1,287	外部に井戸群	弥生後期中頃～後期後半
			2号環溝	4,020	外部に大型井戸1	弥生後期末～古墳前期
3	須玖坂本B地点	福岡県春日市	方形環溝?	—	—	弥生時代後期前半
4	蒲田水ヶ元遺跡	福岡県福岡市	方形環溝	59.5	長方形総柱建物1 (16.5㎡) 20mほど離れて住居群	弥生後期後半
5	野方中原遺跡	福岡県福岡市	方形環溝 (B溝)	713	掘立柱建物2 (21.6、12.4㎡)	弥生終末にA溝と共存
6	笠原遺跡	福岡県福岡市	方形区画環溝 (SD-001,002)	144 (推定185)	掘立柱建物4 (20.4、5、5.5㎡) 1軒は調査区外で規模不明	古墳初頭～中期前半
7	野多田A遺跡	福岡県福岡市	方形環溝 (日) (SD-10,37)	910～ 北区画595	北区画中央西寄りに 総柱建物1 (18.23㎡)	古墳初頭
8	橋本一丁田遺跡	福岡県福岡市	方形環溝 (SD14)	104～(推定156)	東辺は2重溝、ビット9	古墳前期前半
9	東小田七板遺跡	福岡県筑前町	方形環溝 (溝5)	—	—	弥生後期中～後半
10	立明寺地区遺跡B地点	福岡県筑紫野市	方形環溝? (28-S0009)	—	—	弥生後期後半～終末
11	屏賀坂遺跡	福岡県北九州市	方形環溝	—	竪穴式住居3	弥生後期後半～終末
12	殿城戸遺跡	福岡県太宰府市	方形環溝 (7SD100)	324	南東隅に掘立柱建物1 (20.24㎡)	古墳初頭
13	穴江塚田遺跡	福岡県嘉穂町	方形環溝	575	—	古墳前期前半
14	市ノ上東屋敷遺跡	福岡県久留米市	方形環溝 (SD1～5)	535	長方形総柱建物1 (32㎡) 櫛列あり	弥生終末～古墳初頭
15	山口遺跡A地区	福岡県苅田町	方形環溝	327	不明	古墳初頭～前期前半
16	延永ヤヨミ園遺跡	福岡県行橋市	方形環溝 (III-A B区)	290	ビット17	弥生終末～古墳前期前半 古墳前期前半に拡張
			方形環溝 (田) (II区)	720～	竪穴式住居1	弥生終末～古墳前期前半 古墳前期前半に内部を区画
			方形環溝 (V区)	460～	—	古墳前期前半～前期後半
17	大熊桑屋遺跡	福岡県みやこ町	方形環溝?	—	—	古墳初頭～前期前半
18	唐原地区遺跡群 (郷ヶ原遺跡)	福岡県上毛町	方形環溝? (4号方形環溝)	132	不明	古墳初頭
19	右原祇園町遺跡	佐賀県神埼市	方形環溝 (SD1035)	458 (推定841)	布張り小溝 (櫛列)	古墳初頭～前期前半
20	小迫辻原遺跡	大分県日田市	1号方形環溝建物	1,369	総柱建物1 (26㎡)、布張り小溝	古墳初頭
			2号方形環溝建物	1,024 (布張り内676)	総柱建物2 (56、48㎡、布張り) 布張り小溝	古墳初頭
			3号方形環溝建物	324	掘立柱建物1 (30㎡)	古墳初頭
21	下東遺跡	山口県山口市	方形環溝 (日)	1,160～ 南区画754	不明	古墳初頭

第1表 北部九州における方形環溝一覧 (有明型を除く)



三雲・井原遺跡下西地区 (1/1,250)



比恵・那珂遺跡群 (1/1,250)



東小田七板遺跡 (1/1,250)



野方中原遺跡B溝 (1/800)



野方中原遺跡 (1/1,250)



蒲田水ヶ元遺跡 (1/1,250)



蒲田水ヶ元遺跡
方形区画環溝 (1/400)

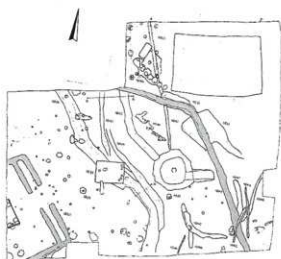


笹原遺跡 (1/400)

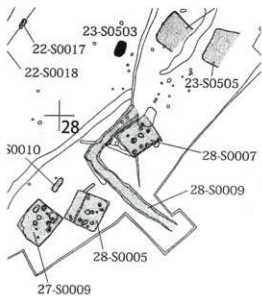
第10図 北部九州における方形環溝①



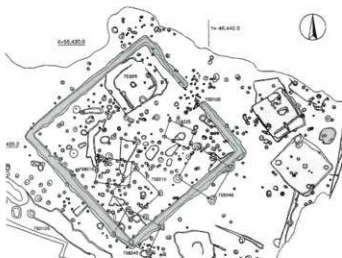
野多目A遺跡 (1/800)



橋本一田遺跡 (1/400)



立明寺地区遺跡B地点 (1/400)

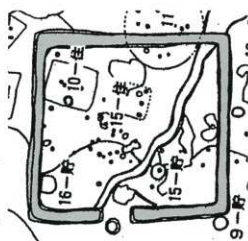
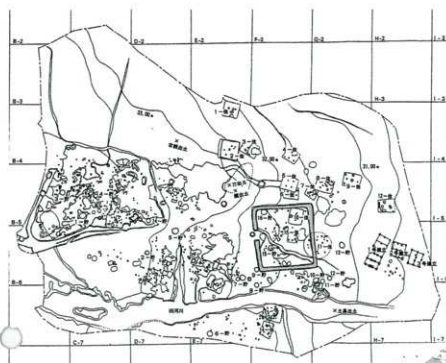


殿城戸遺跡 (1/400)

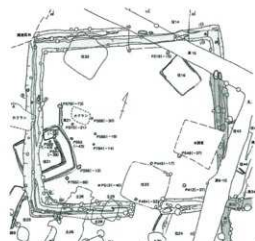


市ノ上東屋敷遺跡 (1/400)

第11図 北部九州における方形環溝②



山口遺跡A地区
(左図：1/800, 上図：1/400)



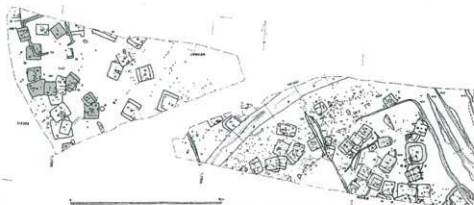
延永ヤヨミ園遺跡II・A・B区 (1/400)



延永ヤヨミ園遺跡II区・V区 (1/800)



大熊桑里遺跡 (1/800)

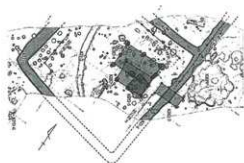


唐原地区遺跡群(郷ヶ原遺跡) (1/1,250)

第12図 北部九州における方形環溝③



右原紙園町遺跡 (1/800)



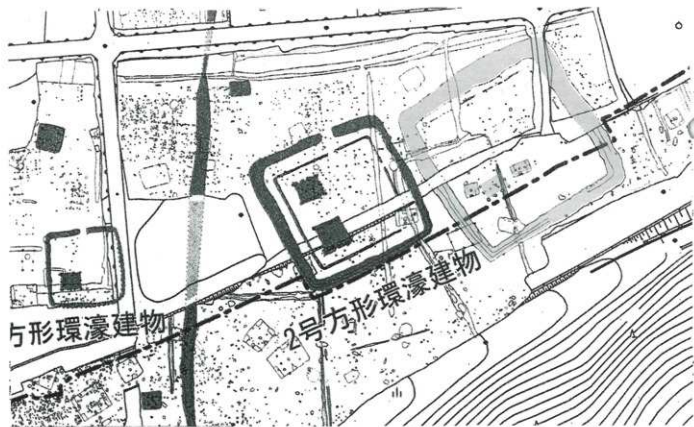
下東遺跡 (1/800)



小迫辻原遺跡Ⅲ期 (1/7,000)



小迫辻原遺跡Ⅳ期 (1/7,000)



小迫辻原遺跡 (1/1,000)

第13回 北部九州における方形環濠④

糸島地域における井戸の時期的変遷と画期

平尾和久（糸島市教育委員会文化課）

1. はじめに

近年、糸島市では九州大学の移転など様々な要因が組み合わさり、発掘調査の件数が増加傾向にある。また、九州大学伊都キャンパス建設に伴う発掘調査も終了し、総括報告書も刊行され、調査成果がまとめられている（大塚編2019）。これらの調査で増加している遺構のひとつが井戸である。糸島市では2020年刊行までの報告書に掲載された井戸が98基あるが、その約半数がここ10年以内に報告されたものである。また、長垂山以西の福岡市西区に所在する井戸は25基であるが、九州大学伊都キャンパス内で12基確認されており、これらの成果から糸島地域で井戸のあり方を検討すべき時期に達したと考えられる。これまでも、糸島市内で井戸の形態の地域差があると指摘されていたが（注1）、井戸の確認事例も増え、ようやく通史的な変遷を検討できる段階に到達したといえる。

2. 研究略史

井戸の研究は日色四郎氏や山本博氏の研究が初期段階に位置付けられる（日色1967・山本1970）。両者の研究では、型式分類や年代の検討とともに井戸の各部名称を整理する必要性等が説かれている。1982年には宇野隆夫氏により井戸各部の分類が行われ、大まかな変遷が示された（宇野1982）。

その後、井戸の研究は、地域・時期別に行われるようになる。北部九州では弥生時代から中世まで研究が見られるが、時期ごとに傾向を把握するものが多い（篠原2000、久住・久住2008、横田1977など）。

井戸のものではないが、井戸で行われた祭祀に関する研究も多い（駒見1992、穂積2013）。なお、井戸枠として用いられる結桶（筒）に関する研究も進んでおり、現段階では博多遺跡群で確認された11世紀後半の結桶が最も古いもので、13世紀までは主に九州内で展開する（鈴木2000）。また、2003年には鐘方正樹氏により『井戸の考古学』が刊行され、現段階における井

戸の研究状況を確認することができる。なお、埋蔵文化財研究集會では『井戸再考』（2008年）、『続・井戸再考』（2013年）として弥生時代～古代を対象とした検討が行われた。

以上のように研究史を概観すると、宇野氏や鐘方氏の研究により列島規模の通史的な井戸構造の変遷を辿ることができるが、地域性の抽出は紙幅の関係もあり難しい。また、北部九州でいえば久住氏などにより時期ごとの井戸の分布のあり方や構造も検討されているが、地域内での通史的な把握は行われていない。たとえば、福岡県内でも博多や太宰府などと糸島とは井戸の変遷や画期が異なる可能性が高い。

そこで、本稿では基礎資料として糸島地域の井戸を集成し、大まかな時期変遷を提示し、画期を見出したい。なお、糸島地域は糸島市と福岡市西区の長垂山以西の範囲として以下の検討をすすめる。

3. 糸島地域における井戸の変遷

(1) 弥生時代

研究史でもふれたように、井戸は弥生時代から確認されるが、現段階では北九州市松本遺跡1号井戸などが最古段階に位置付けられる（佐藤2008）。また、比恵・那珂遺跡では400基以上の井戸が確認されているが（久住・久住2008）、糸島地域では数基にとどまる。

石崎矢風遺跡は糸島市の西部に位置する石崎丘陵の台地東裾から谷部にかかる湧水の激しい地点に所在する。標高は8.4mである。井戸枠は丸太割り抜き材で、平面78cm×60cm、高さ40cmを測る。井戸枠の上端部の南北方向にはU字形の割り込みを入れて排水口としていたようである（第2図4）。また、底には50cm×36cm、厚さ6cmの板材をひく。底からは澄んだ水が出ており、水を採取していることは認められるが、井戸の深さが40cm程度となり、井戸というよりも水汲み場に近いものかもしれない。なお、井戸内及び周辺埋土から弥生時代中期前半の土器と桃核10点が出土している（古川編2010）。

今宿五郎江遺跡は今宿平野東部の扇状地に立地する環濠集落で、環濠は弥生時代中期末頃に掘削され後期後半まで継続する。2次調査1号井戸は断面形態等から貯蔵穴の可能性が考えられたが、湧水点が高く、水量も豊富であることから井戸と判断されている（二宮編1991）。平面2.0m×1.5mの楕円形を呈し、深さは1.2mであるが、0.5～0.7mの遺構面削平があり、本来は2m程度の深さがあったとされる。その場合は二段掘になるか。なお、9次調査421号土坑と422号土坑は平面長方形で（第2図2・3）、深さが1.0m前後あり、前者からは米と思われる炭化物が密集して出土しているが（杉山・阿部編2006）、両者を井戸とする見解もある（久住・久住2008）。

今宿大塚遺跡11次調査では2195号溝下部の掘り下げ中に井戸が確認されている（杉山編2013）。板材を井桁状に組み合わせた井戸枠が一段分確認され、その中央に弥生時代後期前半の甕を正位に据えている（第2図1）。集水栓として機能した可能性がある（注2）。弥生時代の井桁組井戸の事例は少ないが、比叢遺跡6次調査などで確認されており、半島からの影響が想定されている（高野2008）。

潤古屋敷遺跡は糸島市の中央部の糸島水道に面する箇所位置する遺跡で、標高は4m程度である。3号井戸は調査区南端で確認されており、約1/2が調査区外に延びるため、断面図が掲載されていないが、平面が南北方向に1～2m、東西方向に2～3mを測る不整形円形を呈すると想定され、深さが約1mで最下層に砂礫が確認された（瓜生編2013）。井戸からは弥生時代中期前半～中頃の甕と高坏が出土している。しかし、3号井戸は平面の1/6程度のみ掘り下げであり、調査区内での井戸はすべて室町期以降に位置付けられるため、弥生中期の井戸とは断定はできず、可能性の存在に留めておく。

その他、上罐子遺跡でも4基の井戸が確認されている（久住・久住2008）。

（2）古墳時代

古墳時代になると井戸の事例が若干増加する。潤古屋敷遺跡に東接する潤地頭給遺跡Ⅱ区の東側谷部付近で確認された井戸は、平面4.0m×3.3mの不整形円形を呈する。その中央に準構造船の部材

を転用した井戸枠が土圧で押しつぶされたかたちで確認された（第2図5）。部材は6枚からなり、本来は円形に組まれていたと判断される。深さは2mほどで井戸の底では礫が確認された（江野編2005）。井戸枠内からは古墳時代初頭の土師器が出土している。このような船材転用の井戸は市田斉当坊遺跡（京都府久御山町）などでみられる（高野編2008）。船材という丸みを帯びて長い板材が井戸枠として適合すると判断されたのだろう。また、おなじ潤地頭給遺跡のⅣ区からは素掘の井戸も確認されている（江崎編2007）。標高4.5m付近で確認されており、平面は1.05m×0.9mの略円形を呈し、深さは70cm程度で、検出面から40cm下の箇所には段が残る。井戸内からは5世紀前半から中頃の土師器が出土している（第2図7）。

潤地区と雷山川を挟んで東接する志登遺跡群5次調査1号井戸は、標高5.5mほどで確認され、平面は東西0.98m×南北0.95mの方形プランを有する（第2図6）。素掘の井戸で井筒の平面は不整形円形を呈し、深さは3.1mほどを測り、「井戸壁は強固で残存状況は良好」であると報告されている（岡部編1985）。井戸の底から30cmほどの箇所土師器の甕が出土しており、埋没時期は古墳時代前期に位置付けられる。

井牟田遺跡は深江湾に面するラグーン状の地点に形成されており、弥生時代には棄浪系土器や中国式銅剣も出土し、伊都国の港湾的性格が考えられる遺跡である。井戸は1区の標高3.2mの地点で確認された（古川編1994）。掘方は明確に確認できていないが平面が72cm×70cmの隅丸方形を呈する（第2図8）。井戸枠として直径44cmの丸太を割り貫いたものを用い、土師器甕の胴下半部を底敷としている。井戸の深さは検出面から40cm程度である。これは前述した石崎矢風遺跡の井戸と類似しており、水汲み場として機能した可能性もある。時期は古墳時代前期である。このほか、元岡・桑原遺跡22次調査1号井戸も土師器の甕が出土しており、古墳時代に設けられた可能性があるが、調査区が狭小であったため、平面確認にとどまり詳細は不明である（久住編2006）。

（3）飛鳥～平安時代

飛鳥時代～平安時代にかけて井戸の確認事例は増加する。古い事例としては元岡・桑原遺跡群18次調査で確認された井戸がある(古留編2013)。18次調査地点は遺跡の北東部に位置する。立地的には桑原(大原)川の南岸にある北西にむかって開口する狭い谷地形で、外部から遮断された隠蔽性の強い箇所である。6世紀末～7世紀初頭に大規模な造成を行い倉庫と考えられる総柱建物が整然と設置され、7世紀中葉頃に新たな土地区画が行われ居住域も形成されている。7世紀末には製鉄関連遺構が設けられる。井戸は南北2群に分かれる。286号井戸は標高21m付近の流路SX100の谷頭に部分該当する箇所に設けられた石組の井戸で、掘方は南北2.3m、東西1.95m、深さ0.5mである(第2図9)。石組は「南側のみ高さ50cmほどの板石を立て、それを支えるように東西に方面は角礫を積み上げている。最下段は高さ20～30cmの比較的大ぶりの礫が用いられる。それより上部は板状の礫を小口積み」と報告されている。遺物はほとんど出土していないが、人為的造成が加えられた流路SX100から出土した遺物と井戸の立地から7世紀代に位置付けたい。なお、他の石組井戸も出土遺物が少ないが、報告書で中世に築かれたとされる421号井戸を除いてほぼ同時期と考えてよいだろう。なお、このような井戸は飛鳥京城のみ確認されるもので、元岡・桑原遺跡群にヤマト政権中枢から派遣された軍事拠点の存在も想定されている(龍・久住・菅波・山崎2013)。石組井戸そのものは朝鮮半島で確認されており、その影響下による成立も視野に入れる必要がある(鐘方2013)

同じ元岡・桑原遺跡群53次調査5号井戸は平面1.8m×2.0mの不整形、断面は挿鉢状を呈し、深さは約1.0mである(大塚編2017)。井戸枠は西・北・東の三方に板材を立て、横線を渡すが、掘方にそって上方に広がる形で確認された。板材は幅9～11cm、長さ60～90cm、厚さ0.4～1.3cmである。井戸からは小片であるが黒色土器B類や須恵器、土師器等が出土しており、9世紀～10世紀初頭とされる。

元岡・桑原遺跡に南接する泊りユウサキ遺跡では2.16m×2.0m平面円形プランの井戸が確認されている(平尾・田中編2009)。井戸は二段掘で、テラス部分に横板を井桁状にしたものが2段分

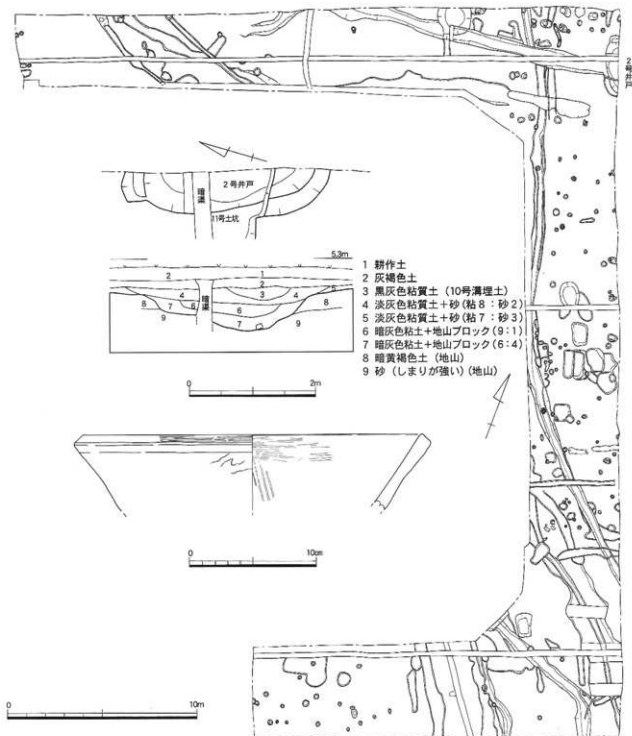
確認されている。井戸上半部の土層図がないため詳細不明であるが、井戸枠の上位部分は抜き取られた可能性もあるだろう(第2図11)。井戸からは須恵器、土師器の他、木簡、稲藁、桃核が出土している。9世紀初頭頃の埋没か。

古墳時代の井戸が確認された志登遺跡群5次調査では8世紀代の井戸が2基確認されている。出土遺物が多い3号井戸をみると、標高5.3mで確認され、長軸1.37m、短軸0.7mの平面長楕円形を呈する。断面は段掘で北側が深くなる(岡部編1985)。井戸内からは須恵器と土師器が出土しており、8世紀中頃に位置付けられる(第2図13)。なお、2号井戸も素掘の井戸であるが、墨書須恵器が出土している。

平安時代になると、志登遺跡4次調査、潤地頭給遺跡Ⅲ-E区、篠原東遺跡J地区などで井戸が確認されるが、いずれも素掘の井戸である(川村他編1985、江野編2006、2018)。一方、旧二丈町にあたる糸島西部では井戸枠を備えるものが多い。曲り田遺跡3次調査で確認された4基の井戸はいずれも方形縦板組の井戸枠をもつ(古川編2001)。なかでも、3号井戸は平面2.5m×2.6mの正円形で、深さは3.1mを測る(第2図15)。断面は二段掘で、テラスは作業スペースと判断されている。井戸枠は遺存状況が悪いが、一辺に4枚の縦板を用いて方形に組み、最下段に自然木の横板が確認される。井戸枠の下には集水施設として曲物を据えている。井戸からは9世紀の土師器が出土している。

才良木遺跡1号井戸は上部に石組、下部に平面六角形の縦板組、集水施設として曲物を用いる(村上編2001)。井戸は砂地に構築されており、縦板は上から打込まれたと判断されている(第2図16)。その後、石組のための掘方を設け、結果的に二段掘になっている。曲物の底面には砂利が敷き詰められており、水の浄化を意図している。遺物は砂利層から熙寧元寶(初鑄1068年)と祥符元寶(初鑄1008年)が出土していることや、周辺の遺構が平安時代後期のものが多いことから、11世紀後半代に位置付けられるか。

この傾向は12世紀代も継続しており、木舟の森遺跡1号井戸(石組+縦板組)、深江辻遺跡(石組)(第2図17)などが認められる(村上編1995、古川編2008)。なお、深江辻遺跡は才



第1図 浦志井尻遺跡2次調査全体図、2号井戸・出土遺物実測図 (1/200・1/60・1/3)

良木遺跡と同様に砂地の遺構面であり、平安時代では両者でのみ石組の井戸が確認されることは興味深い。

なお、糸島東部に所在する飯氏遺跡1号井戸は

残りが悪いが直径1.5mの掘方を持ち、井戸枠として一辺に7枚の縦板を配して方形に組みあげる(松村編1993)。その下に二段の曲物を据え付ける。井戸からは土師器や四耳壺が出土しており、

12世紀後半台に位置付けられる(第2図10)。

(4) 鎌倉・室町時代

中世になると井戸の確認事例が一層増加し、全体の38%がこの段階に設けられる。また、ひとつの遺跡で多数確認されることも特徴の一つである。

中世前半代に位置付けられる鎌倉時代の井戸は志登・潤などの標高4m程度の地点に集中して認められるが、いずれも素掘の井戸である。志登遺跡群では前代から引き続き井戸が確認される。4次調査5号井戸は直径2.2mの不整形を呈し、断面は明瞭な二段掘である。井戸枠等は出ていないため、素掘の井戸と報告されているが、本来は井戸枠があり、取り外された可能性もある。井戸からは土師器皿、杯、瓦器、白磁、石鍋等が出土し、13世紀前半頃に位置付けられる。4号井戸は平面円形で断面掘鉢状の井戸で、検出面から1.05m下が底となるが、湧水は認められない。出土遺物は青磁や土師器皿で埋没時期は13世紀後半か(川村他編1985)。

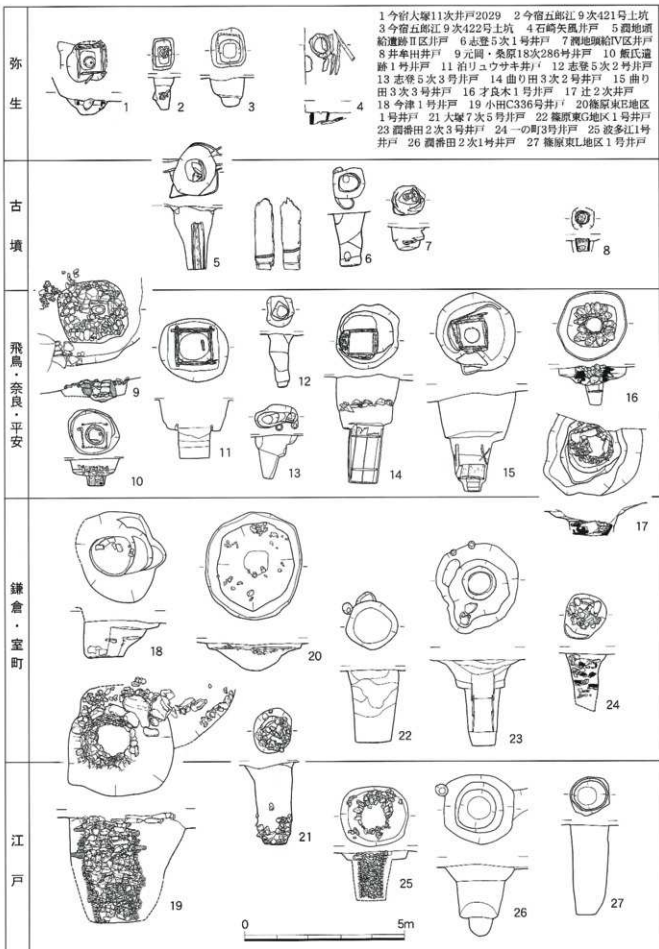
同様の形態のものは、篠原東遺跡E地区1・7号井戸(第2図20)や浦志井尻遺跡2次調査でも確認されている。前者は前原東土地区画整理事業に伴う調査で、7号井戸は標高13.3m地点で確認された。平面はいびつな楕円形を呈し、深さは0.47mで、二段の掘り込みをもつが、断面掘鉢状を呈する(江野編2017)。井戸からは青磁・石鍋のほかには人骨と馬骨が出土している。馬骨は頭骨、四肢骨を伴うが、出土状況からウマは解体されており、左右前肢の取り外し、内臓のとり出し等が認められる。なお、人骨と馬骨は井戸埋没後に土坑を設けて廃棄されたとされる。時期は12世紀後半から13世紀前半に位置付けられる。後者の浦志井尻遺跡2次調査は平成29年度に調査を実施したもので、湧水を伴う平面円形、断面掘鉢状の土坑を複数確認した。調査時は土坑と判断したが、類似との比較から、これらも井戸の一形態と判断してよいだろう。なお、検出面は5m程度である。時期は土師質の掘鉢が出ていることから、16世紀代に位置付けられるか(第1図)。したがって、断面掘鉢状の井戸は長期間にわたって構築されていることが確認できる。

潤古屋敷遺跡1・2次調査は、県道の拡幅を契

機として行われたもので、調査区は両者合わせて幅5~10m、長さ100m程度の長細いものであった。ここから13~14世紀頃の井戸が6基確認された(平尾編2012、瓜生編2013)。いずれも標高4m程度の地点で検出された素掘の井戸で、平面円形、断面が円筒状のものと、二段掘のものも確認されている。なお、潤古屋敷遺跡の南に接する潤地頭給遺跡Ⅲ-W区や潤番田遺跡1次調査では室町時代の井戸が確認され、南西に位置する潤番田遺跡2次調査では江戸時代の井戸がまとまって確認されており、居住域が北から南へ変遷する様子が井戸から復元できる。

中世後期にあたる室町時代も、前代から継続して標高4m程度の潤・志登地区に井戸が築かれる。潤地頭給遺跡は東風小学校建設に伴い発掘調査を実施した遺跡で、その南西隅がⅢ-W区で、素掘の井戸が8基確認されている(江野編2006)。いずれも標高4m付近の検出である。井戸からの出土遺物から、1号井戸は14~15世紀、3・4・6号井戸は15~16世紀、7・8号井戸は16世紀とされる。2・5号井戸からは図化できる遺物は出土していないが、おおよそ他の井戸と同時期と捉えられよう。なお、南北に走る谷を挟んで東側であるⅢ-E区では平安時代の井戸が確認されている。

潤番田遺跡1次調査では標高4m付近で7基の井戸が確認された(平尾編2012)。いずれも素掘の井戸で、瓦質土器や土師器などが出土していることから、16世紀後半頃に埋没したものと判断される。ただ、象嵌青磁が多く確認され、中には筒茶碗や方枕などの希少なものも含まれる。このように志登や潤地区など標高4m付近の糸島低地帯では通史的に素掘の井戸が確認されるが、唯一の例外が結桶(筒)を4段重ねて井戸枠とした潤番田遺跡2次調査3号井戸である(第2図23)。鈴木康之氏によると日本における結桶の展開は出現期(11世紀後半~12世紀)、拡散期(13~14世紀)、普及期(15~16世紀)の三段階に分けることができる(鈴木2002)。結桶はそもそも博多を拠点としていた宋商人がもたらしたものと考えられており、13世紀以前は博多・箱崎・太宰府などで限定的に展開し、13世紀以降瀬戸内以東へも拡散し、15・16世紀になると事例が増加するとされる。結桶そのものの製作技術も変化が



第2図 糸島地域井戸編年表 (1/120)

見られ、14世紀代の結物側板にはヤリガンナによる加工痕、15世紀以降のものには台鉋状工具の痕跡を残す。潤番田遺跡2次3号井戸の結桶(筒)側面は直線的で台鉋状工具痕を残すことから15世紀代以降に築かれ、井戸から出土した瓦質土器や象嵌青磁、土師皿などから16世紀後半に埋没したと判断される(平尾編2020)。なお、当該期における木材を井戸枠とする井戸は、潤番田例を除くと二丈中学校遺跡で確認された井戸のみである。本例は削平が著しく詳細は不明であるが、残された木材の配置から縦板組の井戸枠の可能性はある。時期は周辺の状況から15世紀が想定されている(古川編2003)。

また、やや標高が高い地点に設けられた井戸には瓦組や石組がみられるようになる。一の町遺跡1号・3号井戸は標高13mの地点に設けられたもので、井戸内から石が多数出土している(河合編2009)。いずれも側縁上部に石組の痕跡が残っており、井戸上位のみの石組であろうか。報告書ではいずれも素掘の井戸若しくは溜井の可能性を想定している(第2図24)。

福岡市西区大塚遺跡17次調査の標高9.3mの地点で確認された49号井戸は2度の造り替えが想定される石組の井戸で、人頭大の花崗岩塊を用いられているが、石組は強固ではなく多くの石材が抜け落ちた状態で確認されている。井戸からは瓦質土器や中国陶磁器が出土しており、16世紀前半～後半に位置付けられる(森本編2012)。大塚遺跡では石組井戸が7次調査5号井戸でも確認されている(第2図21)(加藤編1991)。また、小田C遺跡の336号井戸は標高7.8m地点に築かれた石組の井戸で、平面プランは3.3m×3.0mの正円に近い平面プランをもつ。石材は花崗岩や砂岩など雑多なものが用いられている。なお、井戸に接して石組溝が設けられており、排水路などの井戸関連施設と考えられる(池田編2000)。そのほか、出土遺物の記載はないが、元阿・桑原遺跡18次421号井戸は中世の井戸と報告されている(吉留編2010)。

また、当地域では珍しいものとして、瓦組井戸の可能性のある今津遺跡1号井戸がある(第2図18)。本例は標高16mの地点で検出されたもので、長軸2.8mの平面楕円形を呈する掘方をもつ。井戸は三段掘で最下段に平瓦が井戸枠に沿う形で三

枚配されていた。瓦組の井戸であるならばもう少し多くの瓦が出土しても良いと考えられるため、ここでは可能性の指摘にとどめておく。なお、確認された地点は誓願寺の近隣であることから、その関連性も視野に入れる必要がある。瓦そのものは13～14世紀のものとして報告されている(二宮編1987)。

(5) 江戸時代

江戸時代になると波多江遺跡や篠原東遺跡、潤番田遺跡2次調査などで18基の井戸が確認される。

波多江遺跡は戦国期から続く屋敷地の一角で複数の井戸が確認された(橋口編1982)。1号井戸は集落区画溝の近くで確認された石組の井戸で、検出面は標高12.8mである。検出面は直径約2.0mで、井筒は直径0.7mを測る。石組は小形の礫を小口積みしたもので、内部から唐津系陶器、染付などが出土している(第2図25)。

新しいものとして篠原東遺跡L地区1号井戸がある。1号井戸は標高12.9m地点で確認された素掘の井戸で、検出面から60cm以下で礫、土砂や陶磁器が投げ込まれた状態が確認されている(第2図27)。遺物は各種陶磁器類や石臼が確認されており、19世紀後半と報告される(江野編2017)。

また、潤番田遺跡2次調査では標高4m前後の箇所から16基の井戸が確認されているが、16世紀代に位置付けられる3号井戸など3基を除き、すべて17～18世紀の井戸である(第2図26)。いずれも素掘の井戸で、これまで潤地区で確認されている井戸の形状と似たものである。

4. 糸島地域における井戸の画期

以上、糸島地域における井戸の変遷を概観したが、その変遷を図化したものが第2図である。総数123基の时期的内訳をみると、弥生6基、古墳5基、古代29基(飛鳥4基、奈良5基、平安20基)、中世47基(鎌倉12基、室町35基)、江戸18基、不明18基となる。弥生、古墳時代の井戸が少ないのに対し、中世、とくに室町時代の井戸が多く、全体の1/4強を占めることが分かる。なお、江戸時代の井戸は18基であるが、現代の集落が江戸時代から継続しているものが多いことを考

No.	遺跡名	遺構名	所在地	調査別	年代	井戸輪(上一下)	出土遺物	備考
1	志尊遺跡3次	1号井戸	糸島市志尊	古墳前	奈良	8c	土師器	
2	志尊遺跡5次	2号井戸	糸島市志尊	奈良	8c	土師器	須恵器	
3	志尊遺跡5次	3号井戸	糸島市志尊	奈良	8c中頃	土師器	須恵器	
4	志尊遺跡4次	1号井戸	糸島市志尊	家町	15~16c	土師器	瓦葺、土師器、青磁、土師器、土師器	遺物は付いたが不明
5	志尊遺跡4次	2号井戸	糸島市志尊	平安	12c後	土師器	瓦葺、瓦葺、青磁、土師器	
6	志尊遺跡4次	3号井戸	糸島市志尊	平安	10c後	土師器	土師器、瓦葺、青磁、土師器	
7	志尊遺跡4次	4号井戸	糸島市志尊	鎌倉	13c後	土師器	青磁、土師器	断面階梯状
8	志尊遺跡4次	5号井戸	糸島市志尊	鎌倉	13c前	土師器	土師器、瓦葺、白磁	
9	志尊遺跡4次	6号井戸	糸島市志尊	不明	不明	土師器	4.2m	
10	丹波松野西B地点	井戸	糸島市丹波	平安	12cか	土師器	土師器、黒色土師器、瓦葺	文章のみ
11	多久元久久遺跡	井戸	糸島市多久	不明	不明	土師器	10.0m	不明
12	隈部成道遺跡B区	井戸	糸島市隈部	内墳	古墳前	土師器	3.5m	土師器
13	隈部成道遺跡B区	1号井戸	糸島市隈部	平安	10c	土師器	4.6m	土師器
14	隈部成道遺跡B区	2号井戸	糸島市隈部	平安	10cか	土師器	4.5m	土師器、黒色土師器
15	隈部成道遺跡B区	1号井戸	糸島市隈部	家町	15~15c	土師器	4.1m	土師器
16	隈部成道遺跡B区	2号井戸	糸島市隈部	不明	不明	土師器	3.8m	不明
17	隈部成道遺跡B区	3号井戸	糸島市隈部	家町	15~16c	土師器	4.2m	土師器、南朝
18	隈部成道遺跡B区	4号井戸	糸島市隈部	家町	15~16c	土師器	4.1m	瓦葺土師器、土師器
19	隈部成道遺跡B区	5号井戸	糸島市隈部	不明	不明	土師器	4.5m	不明
20	隈部成道遺跡B区	6号井戸	糸島市隈部	家町	15~16c	土師器	4.0m	石葺
21	隈部成道遺跡B区	7号井戸	糸島市隈部	家町	16c	土師器	4.1m	瓦葺土師器、土師器
22	隈部成道遺跡B区	8号井戸	糸島市隈部	家町	16c	土師器	4.6m	土師器
23	隈部成道遺跡B区	井戸	糸島市隈部	古墳	5c前半	土師器	4.6m	土師器
24	百リュウサキ遺跡	井戸	糸島市百	奈良	8c中頃	土師器	8.0m	土師器、須恵器、木簡
25	井手田遺跡	井戸	糸島市二丈深江	古墳前	凡木製板土土師	古墳前	3.2m	土師器
26	木村の森遺跡	1号井戸	糸島市二丈深江	平安	12c後	土師器	2.0m	土師器
27	了本遺跡	1号井戸	糸島市二丈深江	平安	11c	土師器	2.0m	土師器
28	曲刀田遺跡3次	1号井戸	糸島市二丈石崎	平安	9c	土師器	1.1m	土師器
29	曲刀田遺跡3次	2号井戸	糸島市二丈石崎	平安	9c	土師器	8.3m	土師器
30	曲刀田遺跡3次	3号井戸	糸島市二丈石崎	平安	9c	土師器	1.1m	土師器
31	曲刀田遺跡3次	4号井戸	糸島市二丈石崎	平安	9c	土師器	5.5m	土師器
32	二中学校内遺跡	井戸	糸島市二丈深江	室町	15c	土師器	2.8m	不明
33	江津川遺跡2次	石組井戸	糸島市二丈深江	平安	12c	土師器	2.8m	土師器、瓦、北朝
34	の町遺跡	1号井戸	糸島市志摩郡留	室町	11c	土師器	13.0m	中朝の遺物
35	の町遺跡	3号井戸	糸島市志摩郡留	室町	11c	土師器	13.0m	不明
36	渡多江遺跡	1号井戸	糸島市渡多江	江戸	17c	土師器	12.8m	徳川、唐津
37	渡多江遺跡	2号井戸	糸島市渡多江	江戸	17c	土師器	13.0m	不明
38	渡多江遺跡	3号井戸	糸島市渡多江	江戸	17c	土師器	13.0m	不明
39	渡多江遺跡	4号井戸	糸島市渡多江	江戸	17c	土師器	13.0m	不明
40	7輪矢風遺跡	井戸	糸島市石崎	弥生	弥生中前	土師器	8.4m	弥生土師器
41	西香田遺跡1次	1号井戸	糸島市西	室町	16c	土師器	4.5m	土師器、青磁、土師器、瓦葺土師器
42	西香田遺跡1次	2号井戸	糸島市西	室町	16c	土師器	4.5m	瓦葺土師器、土師器
43	西香田遺跡1次	3号井戸	糸島市西	室町	16c	土師器	4.7m	瓦葺土師器、高麗青磁、土師器
44	西香田遺跡1次	4号井戸	糸島市西	室町	16c	土師器	4.7m	瓦葺土師器、土師器
45	西香田遺跡1次	5号井戸	糸島市西	室町	16c	土師器	4.7m	土師器、高麗青磁
46	西香田遺跡1次	6号井戸	糸島市西	室町	16c後	土師器	4.3m	瓦葺土師器、土師器
47	西香田遺跡1次	7号井戸	糸島市西	室町	16c	土師器	4.5m	土師器、高麗青磁、土師器、瓦葺土師器
48	西古高遺跡1次	1号井戸	糸島市西	鎌倉	14c	土師器	4.6m	土師器、高麗青磁
49	西古高遺跡1次	2号井戸	糸島市西	鎌倉	13~14c	土師器	4.3m	土師器、高麗青磁
50	西古高遺跡1次	3号井戸	糸島市西	鎌倉	13~14c	土師器	4.5m	土師器、高麗青磁
51	西古高遺跡1次	4号井戸	糸島市西	鎌倉	13~14c	土師器	4.7m	土師器、高麗青磁
52	西古高遺跡2次	1号井戸	糸島市西	鎌倉	13c中~14c	土師器	4.1m	土師器、高麗青磁
53	西古高遺跡2次	2号井戸	糸島市西	鎌倉	13c中~14c	土師器	4.1m	土師器、高麗青磁
54	西古高遺跡2次	3号井戸	糸島市西	弥生?	弥生中?	土師器	13.3m	土師器
55	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	12c後~13c前	土師器	13.3m	土師器、青磁、土師器、須恵器、石葺
56	藤原東遺跡B地区	2号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.6m	不明
57	藤原東遺跡B地区	3号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.6m	不明
58	藤原東遺跡B地区	4号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.6m	不明
59	藤原東遺跡B地区	5号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.3m	不明
60	藤原東遺跡B地区	6号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.3m	不明
61	藤原東遺跡B地区	7号井戸	糸島市藤原	鎌倉	12c中~13c	土師器	13.3m	青磁、石葺、瓦葺、人骨
62	藤原東遺跡B地区	8号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.0m	不明
63	藤原東遺跡B地区	9号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	11.9m	不明
64	藤原東遺跡B地区	10号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.0m	瓦
65	藤原東遺跡B地区	11号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	13.0m	不明
66	藤原東遺跡B地区	12号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	13.0m	不明
67	藤原東遺跡B地区	13号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.8m	黒色土師器、土師器
68	藤原東遺跡B地区	14号井戸	糸島市藤原	鎌倉	不明	土師器	12.8m	弥生土師器
69	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	16c	土師器	12.8m	瓦葺土師器、高麗青磁、土師器
70	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	19c後	土師器	12.9m	高麗青磁、石葺
71	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	16c	土師器	6.4m	土師器、瓦葺土師器
72	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	16c後	土師器	8.9m	瓦葺土師器
73	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	16c	土師器	4.3m	瓦葺土師器
74	藤原東遺跡B地区	1号井戸	糸島市藤原	鎌倉	10c	土師器	11.6m	土師器
75	藤原東遺跡B地区	2号井戸	糸島市藤原	鎌倉	9cか	土師器	11.6m	土師器

表1 糸島地域井戸一覧表①

No.	遺跡名	遺構名	所在地	埋没区分	年代	井戸径(上→下)	掘出面	出土遺物	備考
76	福原東遺跡1地区	3号井戸	糸島市福原・東志	不明	不明	素掘	11.6m	—	
77	福原東遺跡1地区	4号井戸	糸島市福原・東志	不明	不明	素掘	10.9m	—	
78	福原東遺跡1地区	5号井戸	糸島市福原・東志	不明	不明	素掘	11.6m	褐色土層	
79	志登塚北遺跡	1号井戸	糸島市志登	平安	12c	素掘	4.1m	須石、瓦器	竪穴掘の大溝に穿られる
80	志登塚北遺跡	2号井戸	糸島市志登	平安	11cか	素掘	5.0m	土師器	
81	志登塚北遺跡	3号井戸	糸島市志登	鎌倉	—	素掘	4.0m	須石、土師器	竪穴掘の大溝に穿られる
82	西桑田遺跡2次	1号井戸	糸島市西	江戸	17c中～	素掘	4.9m	陶器、瓦質土層、土師器	
83	西桑田遺跡2次	2号井戸	糸島市西	江戸	17c後半	素掘	4.8m	陶器、瓦質土層、土師器	
84	西桑田遺跡2次	3号井戸	糸島市西	室町	16c後半	結核積	4.9m	陶器、土師器、古銅、白磁、土師器	
85	西桑田遺跡2次	4号井戸	糸島市西	江戸	17cか	素掘	4.8m	土師器	土坑の可能性
86	西桑田遺跡2次	5号井戸	糸島市西	江戸	16c末～17c	素掘	4.9m	土師器	
87	西桑田遺跡2次	6号井戸	糸島市西	江戸	17cか	素掘	4.9m	陶器、古銅、青銅、土師器	
88	西桑田遺跡2次	7号井戸	糸島市西	室町	16cか	素掘	4.9m	白磁、土師器	
89	西桑田遺跡2次	8号井戸	糸島市西	江戸	17c中～後	素掘	4.9m	陶器、土師器	
90	西桑田遺跡2次	9号井戸	糸島市西	江戸	か	素掘	4.9m	土師器	土坑の可能性
91	西桑田遺跡2次	10号井戸	糸島市西	江戸	17c中	素掘	4.9m	陶器、瓦質土層	
92	西桑田遺跡2次	11号井戸	糸島市西	江戸	17～18c	素掘	4.9m	陶器、土師器	
93	西桑田遺跡2次	12号井戸	糸島市西	室町	14・15c	素掘	4.9m	古銅、瓦質土層	
94	西桑田遺跡2次	13号井戸	糸島市西	江戸	17c	素掘	4.8m	陶器、土師器	土坑の可能性
95	西桑田遺跡2次	14号井戸	糸島市西	江戸	17c	素掘	4.9m	陶器、土師器、土師器	
96	西桑田遺跡2次	15号井戸	糸島市西	江戸	16c末～17cか	素掘	4.7m	土師器、土師器	竪井か
97	西桑田遺跡2次	16号井戸	糸島市西	江戸	か	素掘	4.8m	—	
98	西中野遺跡2次	井戸	糸島市西	鎌倉	13c	素掘	—	土師器、瓦質土	三段掘り
99	今津遺跡	1号井戸	福岡市西区	室町	13～14c	瓦組	16.0m	瓦、瓦質土、土師器、白磁	竪穴掘り関係か
100	今津遺跡	2号井戸	福岡市西区	室町	—	素掘	18.7m	—	断面掘跡状
101	今津遺跡	3号井戸	福岡市西区	室町	13～16c	素掘	11.0m	—	
102	今宿五郎江遺跡2次	1号井戸	福岡市西区	弥生	中末～後初	素掘	5.0m	赤土土層	
103	大塚遺跡7次	5号井戸	福岡市西区	室町	15c	石組	9.5m	土師器、木器	
104	船代遺跡群	1号井戸	福岡市西区	平安	12c後	方網縦板+曲物	12.8m	土師器、白磁	
105	小田江遺跡	336号土坑	福岡市西区	室町	16c	石組	7.8m	須石、瓦質土層、土師器	付属施設有
106	元岡・桑原遺跡2次	1号土坑	福岡市西区	平安	—	素掘	15.4m	—	土層から
107	今宿五郎江遺跡9次	421号井戸	福岡市西区	弥生	中末～後初	素掘	8.3m	弥生土層	
108	今宿五郎江遺跡9次	422号井戸	福岡市西区	弥生	中期末	素掘	約8.0m	—	
109	元岡・桑原遺跡22次	1号井戸	福岡市西区	古墳	6cか	素掘	11.3m	土師器(他)	文章のみ
110	元岡・桑原遺跡22次	2号井戸	福岡市西区	奈良	8c前半	素掘	11.6m	—	井戸の可能性
111	元岡・桑原遺跡23次	11号土坑	福岡市西区	室町	不明	不明	12.0m	—	平面プランのみ
112	元岡・桑原遺跡26次	20号土坑	福岡市西区	室町	13～14c	不明	12.0m	土師器	
113	大塚遺跡13次	9号井戸	福岡市西区	室町	16cか	素掘	6.3m	—	
114	大塚遺跡13次	10号井戸	福岡市西区	室町	16cか	素掘	6.3m	—	
115	元岡・桑原遺跡18次	286号井戸	福岡市西区	飛鳥	7cか	石組	21.0m	未記載	
116	元岡・桑原遺跡18次	287号井戸	福岡市西区	飛鳥	7cか	石組	21.5m	須石層	
117	元岡・桑原遺跡18次	421号井戸	福岡市西区	室町	室町	か	約16.0m	未記載	
118	元岡・桑原遺跡18次	422号井戸	福岡市西区	飛鳥	7cか	石組	15.5m	土師器	
119	元岡・桑原遺跡18次	429号井戸	福岡市西区	奈良	奈良	か	15.4m	未記載	422号井戸より検出
120	元岡・桑原遺跡18次	453号井戸	福岡市西区	飛鳥	7cか	石組	14.3m	未記載	
121	大塚遺跡17次	49号井戸	福岡市西区	室町	16c前～後	石組	8.0m	陶器、瓦質土、土師器	
122	今宿五郎江遺跡11次	井戸302号	福岡市西区	弥生	弥生	後	4.0m	弥生土層	
123	元岡・桑原遺跡33次	5号井戸	福岡市西区	平安	9～10c	縦板組	3.9m	褐色土層、土師器、須石層、粘土瓦	断面掘跡状

表2 糸島地域井戸一覧表②

えること、井戸は現集落のなかに残されている可能性が高く、数量的比較は一定の目安に過ぎない。

また、大まかな傾向として、調・志登地区などの糸島低地帯では素掘の井戸が多く、やや標高が高い地点に築かれた井戸と井戸枠が設けられるようである。これは井戸が築かれる地盤の問題もある。なお、7世紀の元岡・桑原遺跡で突然、石組井戸が築かれるが、後の時代に継続することなく点的に終わることも注目される。これは既に指摘されているようにヤマト政権による影響と考えられ、时期的な特定は難しいものの、征新羅大將軍久米皇子の駐屯など歴史的事象と関連付けられる可能性が大きい。

このように概観される糸島地域の井戸について、

現段階では3つの画期が設定できる。

第1の画期(弥生時代中期)糸島地域における井戸の始まり

現段階では石崎矢風遺跡の丸太割板井戸が弥生時代中期前半で糸島地域最古に位置付けられる。その後、東の今宿五郎江遺跡、今宿大塚遺跡で継続的にみられる。特に今宿大塚遺跡11次調査井戸2029は横板組の井戸枠をもち、すでにある程度完成された形態を示す。将来的には初原的な井戸が確認され、他地域と同様に弥生時代前期にまでさかのぼる可能性がある。また、旧二丈町域で割板井戸がみられることも特徴である。なお、拠点集落である三雲・井原遺跡では井戸が確認されないが、遺跡の東西を北流する瑞梅寺川・川原川より飲料水等を得ていたものと思われる。

世紀初頭とされている。分析の結果、銅を主体として亜鉛、鉛が検出された。錫は認められない。博多の資料は板状の部分に精緻な文様が刻まれるなど材質も含め平原の資料とは相違点も多いが、参考例として挙げておきたい。(比佐・松園)

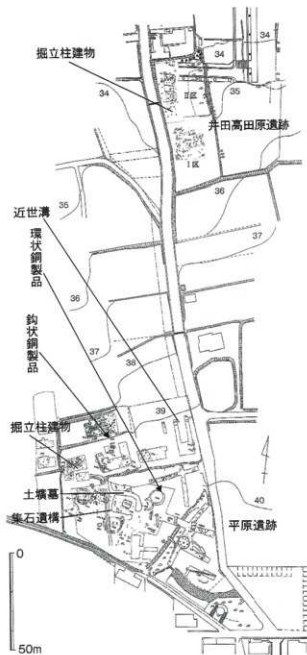


図3 平原遺跡周辺における中近世遺構・遺物の分布

【参考文献】

- 常松幹雄1993『博多遺跡群29-博多遺跡群第53・67次調査報告』福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎・松園菜穂2018『博多における中世後期の非鉄金属生産』『博多・山口・大分三都市研究会第8回研究会報告資料集』博多研究会
- 福岡市埋蔵文化財センター1993『福岡市埋蔵文化財センター年報12 平成4年度』

4. おわりに

今回の蛍光X線分析によって、双方の銅製品がいずれも真鍮製である可能性が高まり、弥生～古墳期の墳墓との関係については極めて薄いことを確認することができた。

とりわけ、環状銅製品は煙管の火皿の一部である可能性が指摘された。雁首との溶接部付近で分離したものであろうか。わが国における真鍮製品の出現時期を考慮すれば、中近世の資料となる。

また、一般的に喫煙文化がわが国に伝来したのは16世紀とされ、全国的な展開をみせるのは江戸時代以降と考えられ、煙管もこれとともに普及したと推定される。

平原遺跡の過去の調査結果を顧みれば、各所で中近世の遺構、遺物が確認されている。

1号墓の周溝から龍泉窯系青磁を副葬した土壇墓が出土しており、井田高原遺跡では三方に板垣を配した掘立柱建物が確認され、これらは鎌倉期の遺構、遺物である。

また、1号墓の周溝内の集石群や8番地の近世溝では近世陶磁器も出土している。

煙管については、わが国における喫煙文化の開始期を考慮すれば戦国末期以後の産物である可能性が高いと考えられる。

なお、鉤状銅製品は比較対象となる資料が少なく、時期やその用途についての検討は、今後の類例の増加に期待したい。(岡部)

【参考文献】

- 鈴木達也1999『喫煙伝来史の研究』思文閣出版
- 岡部裕俊編2017『新訂版平原遺跡』糸島市教育委員会

壱岐島の横穴式石室と九州 —複室構造横穴式石室の分布から—

角 浩行

1. はじめに

壱岐島の古墳時代は壱岐古墳群（田中2008）に象徴される。壱岐古墳群は前方後円墳2基と大型の円墳4基で構成され、最古の対馬塚古墳が6世紀の第3四半期に出現し、7世紀初頭の築造と考えられる掛木古墳で終焉を迎える。これらは壱岐島全体を統括した首長の墓と考えられ、新羅土器の副葬や甕塚古墳にみられる壮麗な馬具などの副葬品から被葬者は朝鮮半島との交渉をも担っていたと考えられている。

壱岐古墳群の石室の特徴は、首長墓だけではなく同時に築造された群集墳にも及んでおり、壱岐島の横穴式石室は形態的に高い斉性を示している（註1）。また、6世紀後半から7世紀前半にかけての首長墓を含めた古墳の増大は島内的な要因と考えるよりは、外的要因による九州からの集団の移住があるのではないかと指摘がある（広瀬2010）。

そこで壱岐島の横穴式石室の源流がどこにあるのか、群集墳の様相に関連性はあるのかについて北・中部九州の横穴式石室との比較を通して探してみたい。

2. 壱岐島の横穴式石室の特徴

壱岐の横穴式石室の特徴については、広瀬和雄の研究（広瀬2010）によれば、次のようにまとめられている。まず、首長墓である壱岐古墳群については、①複室構造の両袖式横穴式石室で、縦長の立柱石によって玄門部と前門部が構成され、それが内側に向かって突き出す。外側から板石を立てかけて閉塞するための装置である。②高い玄室は前壁を構成し、上半部の壁石は内側に持ち送る。③奥壁底部には鏡石と呼ばれる巨大な1枚石を置き、側壁底部には腰石を据える。④玄室前壁の一部を構成する玄門部の天井石は玄門立柱石よりも玄室内部に張り出す。⑤玄室奥壁に沿って石棺を安置する。⑥玄室、第1前室、第2前室（中室）ともに敷石を

敷く。⑦前室と羨道の天井部は前壁石のそれも含めて平坦で、前室が一段高く設けられていない。

まず、注目したいのが複室構造であることである。さらに前室と羨道の天井部は前壁石のそれも含めて平坦で、前室が一段高く設けられていない点である。この点については蔵富士寛が、前室の天井が羨道の天井より高いもの（A類）、前室の天井が羨道の天井と同じ高さのもの（B類）に分類している（蔵富士2020他）ので、それに従い前室の天井形態の判別が可能な例を対象としてみてゆきたい（註2）。

3. 北・中部九州の複室構造横穴式石室の分布

（1）6世紀中頃以前（図2・3表1）

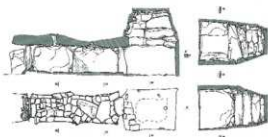
天井形態のわかる複室構造の横穴式石室の中で最も古いものは5世紀後半の伝左山古墳（1）である。これは九州の複室構造横穴式石室の中でも最古のもので前室の天井はB類である。6世紀前半（註3）にはA類の大坊古墳（2）、が出現し、B類では鬼のいわや古墳（3）、淵上古墳（4）がある。

6世紀中頃になるとA類では王塚古墳（5）、五郎山古墳（6）、田代太田古墳（7）（註4）、下馬場古墳（8）乗場古墳（9）童男山11号墳（10）、チブサン古墳（11）、釜尾古墳（12）が、B類では東光寺剣塚古墳（13）、神松寺御陵古墳（14）、袈裟尾高塚古墳（15）大野窟古墳（16）がある。

現在のところ最も古い複室構造の横穴式石室はB類で、6世紀前半には菊池川流域にB類が存在し、遠く離れた唐津市に出現している。また、同時期にはA類も出現するが、伝左山古墳のすぐそばに1基である。6世紀中頃になると北は遠賀川上流域、南は八代海沿岸まで広がる。A類は福岡県と佐賀県東部、熊本県北部に分布し、B類は福岡平野、菊池川流域、八代海沿岸に分布する。



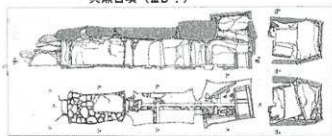
対馬塚古墳 (ⅢA)



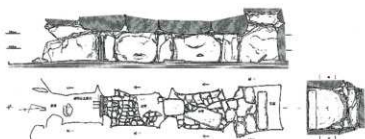
双六古墳 (ⅢB)



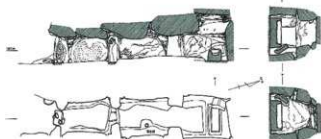
兵潮古墳 (ⅢB?)



笹塚古墳 (ⅢB)



鬼の窟古墳 (ⅢB)



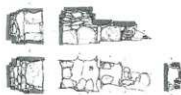
樹木古墳 (ⅣB)



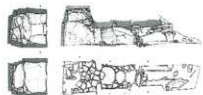
百田頭3号墳 (ⅢB)



山ノ神5号墳 (ⅢB)



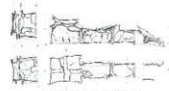
百田頭6号墳 (ⅢB)



釜蓋5号墳 (ⅣA)



妙泉寺3号墳 (ⅣA)



釜蓋2号墳 (ⅣA)



釜蓋6号墳 (ⅣB?)

図1 壱岐島の古墳の石室 (1/250)

0 5m

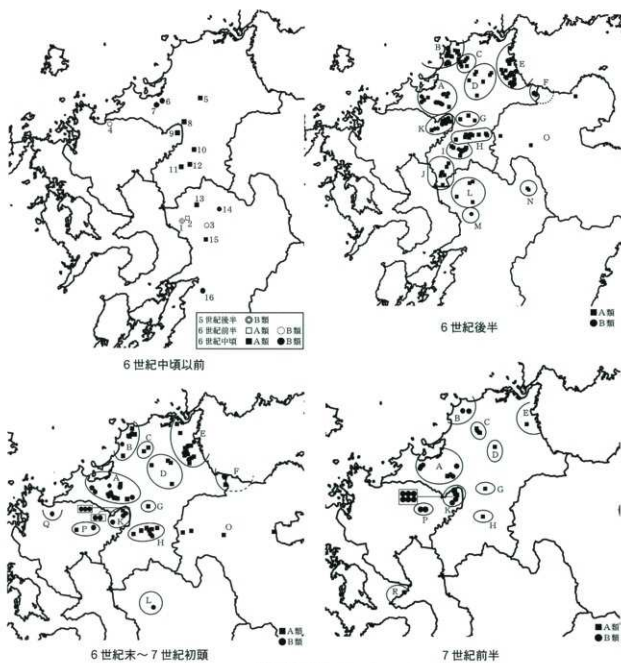


図2 複室構造横穴式石室の分布

表1 複室構造横穴式石室（6世紀中頃以前）

№	古墳名	経緯	時期	所在地	備考	№	古墳名	経緯	時期	所在地	備考
1	伝左山古墳	B類	5C後半	玉名市豊額木	円墳、径35m	9	田代太田古墳	A類	6C中頃?	鳥籠市田代本町	円墳、径40m、装飾古墳、築造当初は墳墓構造
2	大坊古墳	A類	6C前半～中頃	玉名市玉名	前方後円墳、全長54m、装飾古墳	10	下高塚古墳	A類	6C中頃?	久留米市東野町吉木	円墳、直径40m、装飾古墳
3	鬼のいわや古墳	B類	6C前半?	柳本市北区榎木町	円墳、径20m	11	桑塚古墳	A類	6C中頃	八女市吉田	前方後円墳、全長70m、装飾古墳
4	湖上古墳	B類	II～III A	鹿津市浜玉町湖上	墳丘規模、形状不明	12	重房山11号墳	A類	III A	八女市山内	墳形・規模不明、径15mほどの円墳か?
5	王塚古墳	A類	III A	桂川町寿命	前方後円墳、全長86m、装飾古墳	13	チブザン古墳	A類	III A	山重市城	前方後円墳、全長44m、装飾古墳
6	東光寺剱塚古墳	B類	III A	福岡市博多区竹下3丁目	前方後円墳、全長約74m	14	筑波尾高塚古墳	B類	6C中頃?	菊池市筑波尾	円墳、径20m強、装飾古墳(鎌形)
7	神松寺剱塚古墳	B類	6C中頃	福岡市城南区神松寺1丁目	前方後円墳、全長約20m	15	尾尾古墳	A類	III A	柳本市北区尾尾町	円墳、約径30m、装飾古墳、石室形
8	五郎山古墳	A類	III A	筑紫野市藤田三丁目	円墳、径32m、装飾古墳	16	大野塚古墳	B類	III A	水川町大野	前方後円墳、全長122.8m、装飾古墳

また、地域の首長墓とされる前方後円墳の主体部としてはA類が全長86mの王塚古墳、全長70mの乗場古墳、B類は全長123mの大野窟古墳、全長74mの東光寺剣塚古墳にみられる。また、A類は全長50～40m程度の前方後円墳や直径40～30mの円墳などにも採用されている。B類も直径30～20mの円墳、全長20mの前方後円墳に採用されている。A類・B類ともに首長墓から中小古墳にまで採用されており、ある一定の階層のみが造ることができるといった規制はなかったようである。

この時期になると群集墳の築造の増加に伴い複室構造の横六式石室の数が少なく、今後、資料化が進めば状況が変わる可能性がある。

(2) 6世紀後半(図2・4・5表2)

この時期になると群集墳の築造の増加に伴い複室構造の横六式石室も増加する。

また、対象資料が多い福岡県東部や佐賀県東部については地域ごとのA類・B類の分布にも特徴がみられるので、小地域を設定して、みてゆきたい。

①福岡・糟屋地区(A)

B類が主体で少数のA類が存在する。さらに細かく見てゆくと早良平野西部と那珂川市～大野城市西部にはB類のみが存在する。大野城市東部～宇美町西部にはA類・B類が混在する。早良平野東部の油山山麓に1基、筑紫野市に1基のA類が存在する。全てが群集墳に含まれる小規模古墳である。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し(註5)、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの4分の1～2分の1程度である。しかし、観音山平石Ⅲ-3号墳と観音浦南-3号は、袖石が3～4段積みで腰石もやや小ぶりでの他の古墳と様相が違う。

②宗像地区(B)

福津市域から宗像市域にかけての地域で、古代宗像氏に繋がる一族の奥津城とみられる新原・奴山古墳群が含まれる。全てがA類である。このうち相原古墳は全長62m以上の前方後円墳で、地域の首長墓と考えられ、桜京古墳も全長39mの前方後円墳で、装飾古墳である。この2基と新原・奴山44号墳には石棚がある。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石が3～5段

程度の石積みであり、腰石は設置するが玄室の高さの4分の1程度のもが多い。腰石より上部の石材は腰石に比べてかなり小ぶりで明確な差がある。また、天井が高く造られる傾向がある。これらの特徴から「宗像(後期)型」が設定されている(小嶋2009)。

③犬鳴川流域地区(C)

宮若市7例、鞍手町に1例の計8例があるが、全てA類である。新延大塚古墳が直径30mの円墳である以外は小規模古墳であり、装飾古墳として有名な竹原古墳も含まれる。

石室の特徴は2つに分かれる。新延大塚古墳、中ノ浦古墳、松ヶ元1号墳、金丸古墳は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。その他の4基は玄門、前門の袖石が2～3段程度の石積みであり、腰石はあまり目立たない。これは宗像型の特徴に近い。竹原古墳、里1号墳には石棚がある。

④遠賀川上流地区(D)

直方市～嘉麻市、田川地区を含む地域で、7例がある。いずれもA類である。彦山川流域の田川地区は、遠賀川本流域とは丘陵で区別され、別の小地域に区分したほうが良いかもしれない。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの3分の1程度であるが、夏吉1号墳、同4-1号墳は腰石が大型である。川島1号墳には石棚がある。夏吉1号墳は左側壁に石棚がある珍しい例である。

⑤周防灘沿岸北部地区(E)

荏田町、行橋市、みやこ町などを含む地域で前期の石塚山古墳などをはじめとした多数の古墳の存在が知られている。A類(16例)が主体であるが、B類(4例)もわずかに存在する。首長墓としては、全長82mの前方後円墳である庄屋塚古墳(前部石室)がA類、全長40m以上の前方後円墳である半人塚古墳がB類(註6)である。直径25mの円墳である恩塚古墳はA類である。

石室の特徴は、A類、B類ともに玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの3分の1程度のもが多い。ただ、A類のうち宮の谷北2号



伝左山古墳



源上古墳



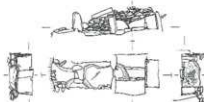
鬼のいわや古墳



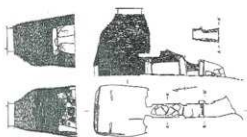
大坊古墳



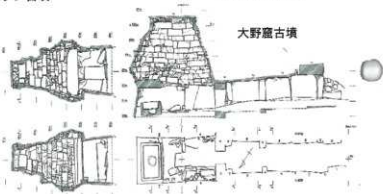
テブサン古墳



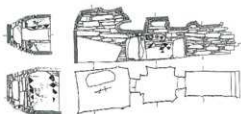
袈裟尾高塚古墳



釜尾古墳



大野窟古墳



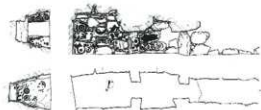
乗場古墳



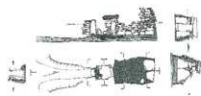
東光寺剱塚古墳



王塚古墳



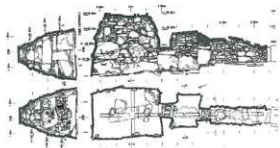
下馬場古墳



神松寺御領古墳



童男山11号墳



五郎山古墳



田代太田古墳

6 C 中頃以前

0 5m

図3 複室構造横穴式石室1 (1/250)

墳、堂がえり2号墳は、玄關、前門の袖石が3段程度の石積みとなっている。

また、竹並D-6号、八景山山龍4・6号は腰石が大型化し巨石化の様相を呈している。

⑥周防灘沿岸南部地区（F）

福岡県豊前市から大分県中津市にかけての地域である。2例があるがいずれもB類で、小規模な古墳である。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの3分の1程度である。前室の平面プランは小型の横長方形である。

⑦筑後川中流北岸地区（G）

3例と少ないが、いずれもA類である。花立山古墳、湯ノ隈古墳は玄室、前室ともに平面プランは長方形であるが、下瀬名子1号墳は筑後地方に特有の胴張り（註7）である。

また、石室の特徴は、下瀬名子1号墳が玄門、前門の袖石を2・3段積みにし、側壁には明確な腰石がみられない。他の2基は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの3分の1程度である。

⑧筑後川中流南岸地区（H）

うきは市から久留米市にかけての耳納山地北麓に多数の調査例が存在する。10例あるが、全てA類である。平面プランは重定古墳、薬師下南古墳が玄室、前室ともに長方形である。塚花塚古墳、寺徳古墳は玄室がわずかに胴張りで前室は方形である。他の古墳は玄室が胴張りである。岩竹2号墳は、玄室が隅丸方形に近く、前室も円形に近い。

また、石室の特徴は、重定古墳は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、大型の腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの2分の1程度であり、石棚がある。塚花塚古墳、寺徳古墳は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用するが、側壁に明確な腰石はなく、基底部から比較的大ぶりの石を使用する。薬師下南古墳もこれに近い。他の古墳は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用するが、側壁には明確な腰石はなく、基底部から天井まで小ぶりの石を使用している。高良山西麓に位置する岩竹2号墳は、八女地区と同様の板石積みである（註8）。

⑨八女地区（I）

広川町から八女市にかけての地域で、ほとんどがA類であるが、丸山塚古墳のみがB類である。

童男山1号墳が直径48m、丸山塚古墳は直径30mの円墳である。玄室の平面プランは童男山1号墳、丸山塚古墳（註9）、大塚古墳が長方形であるが、他の古墳は全て胴張りである。童男山1号墳には石屋形があり、中に割貫式の石棺が納められている。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用するが、玄室が胴張りの古墳は側壁には明確な腰石がなく、基底部から天井まで板石積みである。玄室が長方形の古墳は側壁に腰石を設置する。童男山1号墳、丸山塚古墳は腰石の上は板石を積み上げる。大塚古墳は腰石の高さが玄室の高さの2分の1を超えており、巨石化の様相を呈している。

⑩大牟田・みやま地区（J）

大牟田市からみやま市にかけての地域で、有明海沿岸に位置する。7例があるが全てA類である。平面プランはほとんどが玄室及び前室ともに長方形または方形であるが、山内2号墳のみ胴張りである。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの3分の1～4分の1程度である。山内2号墳のみ筑後型の特徴をもつ。成合寺谷1号墳は壁体に板石を使用しており、石棚がある。他の古墳は小ぶりの自然石を使用している。萩の尾古墳は切り石に近い割石を使用し、大型の腰石を持ち、石棚がある。装飾古墳である。

八女地区に隣接するが、平面プラン、石室の構築方法が全く違う。

⑪佐賀東部地区（K）

背振山地の東麓から南麓にかけての地域で、鳥栖市から吉野ヶ里町にかけて調査例がある。A類とB類が混在するが、A類が5例、B類が7例とB類がやや多い。群集墳に含まれる小規模な古墳が多い。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの3分の1～4分の1程度である。A類とB類で石材、構築方法に明確な差はみられない。前室の平面プランはほとんどが小型の横長の長方形である。吉野ヶ里町の西一本杉S T 012号墳のみ

が、前室が方形に近い。

ヒャーガンサン古墳は直径20mの円墳で奥壁に彩色壁画を持つ装飾古墳である。

②菊池川流域地区（L）

4例があるが、玉名市1例、山鹿市2例、熊本市北区植木町1例で、地理的にみるとさらに小地域に分けられるかもしれないが、とりあえず一地域としておく。全てA類である。

石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、永安寺東古墳、弁慶穴古墳、オプサン古墳は腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの2分の1かそれ以上であり、大型のものである。永安寺東古墳、弁慶穴古墳は彩色壁画を持つ装飾古墳であり、丁寧に整形された石材を使用している。玄室には石屋形がある。石川山3号墳の側壁には目立った腰石はない。

③白川流域地区（M）

小塚3号墳の1例のみでB類である。石室の特徴は、玄門、前門の袖石にやや厚手の板状の立石を使用し、玄室の側壁は基底部から板石積みで構築し、腰石は設置しない。玄室の両側壁に3～4枚の石を石障風に立てているのが特徴である。

④阿蘇北部地区（N）

阿蘇山の外輪山麓に隣接して2例がある。いずれもA類である。石室の特徴は、玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、大型の腰石を設置する。腰石の高さは玄室の高さの2分の1程度である。腰石は長方形に近く整形され、上部の石も丁寧に整形されたものが多い。玄室には石屋形がある。

⑤大分県域（O）

本来はいくつかの小地域を設定すべきだが、資料例が少ないので一括して記述する。筑後川上流域の日田市に1例、さらに上流の玖珠町に1例、周防灘に面した豊後高田市に1例がある。いずれもA類である。

石室の特徴は、ランドヤ1号墳と鬼塚古墳は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石はあまり目立たない。石室の形態は筑後川中流域にある塚花塚古墳や寺徳古墳に近い。いずれも装飾古墳である。雷鬼岩屋古墳は大型の腰石を設置している。石室の構築法には地域ごとの特色がある。

（3）6世紀末～7世紀初頭（図2・5・6 表3）

この時期も前期に引き続き群集墳が築造される。前項で設定した小地域ごとみにみてゆきたい。

①福岡・糟屋地区（A）

B類が主体でわずかにA類が3例存在する。夫婦塚2号墳（註10）は1辺35mの方墳、今里不動古墳は直径約34mの円墳で、他は小規模古墳で群集墳中に存在する。

小規模古墳の石室の特徴は、玄門、前門の袖石が2～3段積みになるものが目立ち、腰石もやや小ぶりになる傾向がある。

一方、夫婦塚2号墳は全ての側壁と奥壁を大型の1枚岩で構築し、袖石も天井に届く柱状の石を使用している。寺塚大観音古墳、今里不動古墳も腰石が大型化し巨石墳化がみられる。

②宗像地区（B）

ほとんどがA類（7例）であるが、B類（2例）もみられるようになる。

石室の特徴は、前代とほぼ変わらないが、船原古墳、池田桜B-03号墳、相原2号墳は、腰石の大型化が目立ち、使用する石材も大型のもので巨石墳化している。船原古墳は全長45.5m以上の前方後円墳、池田桜B-03号墳は直径30mの円墳、相原2号墳は直径20.8mの円墳である。

③犬鳴川流域地区（C）

2例があるがいずれもA類である。石室の特徴は、前代と変わらず2種類あるが、それぞれ1例ずつである。いずれも小規模な古墳である。

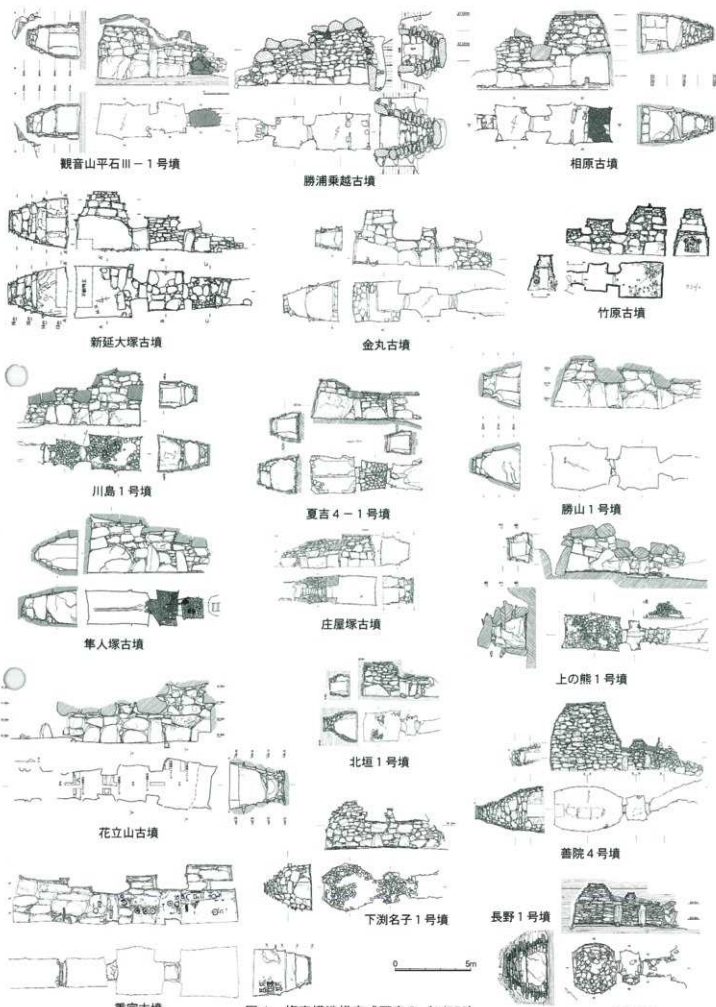
④遠賀川上流地区（D）

4例があるが、いずれもA類である。川島古墳、伊方古墳は直径30mほどの円墳である。川島古墳は装飾古墳で石棚がある。

石室の特徴は、前代とほぼ変わらないが、腰石の大型化や使用された石材も大型化の傾向があり、巨石墳化の傾向がみられる。川島古墳は楣石の上に前壁2段の石積みを行い天井石を乗せるが、他の3基は楣石の上に直接天井石を乗せており、前壁の高さが低い。また、川島古墳は隅丸方形の巨石が多いが、他の3基は長方形に近い形に整形された石を使い、石室の印象がかなり違う。

⑤周防灘沿岸北部地区（E）

A類（11例）が主体であるが、B類（3例）も少数存在する。首長墓とみられるのは直径40mの鏡塚古墳、39m×37mの方墳の桶塚古墳でいずれもA類である。



観音山平石Ⅲ-1号墳

勝浦栗越古墳

相原古墳

新延大塚古墳

金丸古墳

竹原古墳

川島1号墳

夏吉4-1号墳

勝山1号墳

華人塚古墳

庄屋塚古墳

上の熊1号墳

花立山古墳

北垣1号墳

善院4号墳

下刈名子1号墳

長野1号墳

重定古墳

図4 複室構造横穴式石室2 (1/250)

6C後半

石室の特徴は、A類、B類ともに前代と同じであるが、ほとんどの古墳の腰石が大型化し、橋塚古墳、綾塚古墳に象徴されるように巨石墳化を呈する。日明一本松塚古墳は奥壁に彩色模様がある装飾古墳である。

⑥周防灘沿岸南部地区（F）

2例あるがA類、B類それぞれ1例である。石室の特徴は、前代と同じであるが、天仲寺古墳は腰石が大型化し、巨石墳化を呈する。

⑦筑後川中流北岸地区（G）

下洞名子3号墳の1例のみで、A類である。玄室の平面プランは胴張りで、円形に近いが、石室の特徴は前代と変わらない。

⑧筑後川中流南岸地区（H）

10例あるが、全てA類である。益生田A-2号墳、同13号墳、中原狐塚古墳は玄室の平面プランがわずかに胴張りで前室は方形である。他の古墳は玄室が胴張りである。

石室の特徴は、前代と同じであるが、胴張りの石室に使われる石材はやや大ぶりのものを使っている。西館古墳、中原狐塚古墳、前畑古墳は装飾古墳である。

⑨佐賀県東部地区（K）

9例あるが、B類が主体で、水呑4号墳、都谷B-S T001の2例のみがA類である。

石室の特徴は、前代と同じであるが、東十郎4-4号墳は腰石がやや大型化している。

高柳大塚古墳は全長約30mの前方後円墳であるが、これのみ玄室の側壁、奥壁ともに1枚の大石で構築され、他の石材も大型で巨石墳となっている。

⑩佐賀県中部地区（P）

佐賀市から小城市にかけての地域で2例があるが、黒土原ST003はB類、西谷六角2号墳はA類である。

石室の特徴は、佐賀県東部地区とほぼ同じであるが、前室の平面プランは方形に近い。

⑪唐津湾沿岸地区（Q）

葉山尻2号墳の1例のみで、B類である。石室の特徴は、他の佐賀県域の古墳と同様であるが、腰石がやや大型化しており、玄室と前室の面積がほぼ同じである。義道の天井が準人塚古墳と同様に1段下がる特殊な形態である。

⑫菊池川流域地区（L）

石川山4号墳1例のみでB類である。石室の特徴は、前代と同じであるが、前室は両側壁が長方形に整形された1枚石で構築され、玄室の腰石も同じ高さの1枚石で構築されている。玄室には石屋形がある。

⑬大分県域（O）

4例あり、全てA類である。石室の特徴は、鬼ノ岩屋1号墳と鬼ヶ城古墳は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石の高さは玄室の高さの2分の1から3分の2に達する。鬼ノ岩屋1号墳は巨石墳で石屋形がある。鬼ヶ城古墳には石棚がある。

穴観音古墳、法恩寺山3号墳は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石はあまり目立たないか、みられない。いずれも装飾古墳である。法恩寺山3号墳は玄室が胴張りで、前室の面積が広がり、屍床をもつ特殊な形態である。

(4) 7世紀前半（図2・6表4）

この時期になると群集墳の築造の減少に伴い複室構造の横穴式石室も減少する。

①福岡・糟屋地区（A）

B類が主体であり、A類は1例のみである。石室の特徴は、前代と変わらないが、早良平野西部では前室の平面プランが方形に近く、大野城市西部では横長の長方形となるなど、古墳群単位での特徴があるようである。

②宗像地区（B）

2例と少ないが、いずれもB類である。石室の特徴は、玄室側壁の腰石が大型となり、高さが玄室の2分の1程度となる。腰石上部の石材も大ぶりとなっている。

③犬鳴川流域地区（C）

4例があるが、A類が3例、B類が1例でA類が主体である。石室の特徴は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、その上に1枚の石をはさみ欄石を乗せる。腰石は大型化するが、東向原3号墳は目立った腰石がない。損ヶ熊1号墳は奥壁に彩色模様がある装飾古墳である。

④遠賀川上流地区（D）

仁保4号墳の1例のみでA類である。石室の特徴は、ほぼ前代と同じであるが、玄室の平面プランが方形に近いのに対し、前室は長さが玄室より長い縦長の長方形を呈する。

⑤周防灘沿岸北部地区（E）

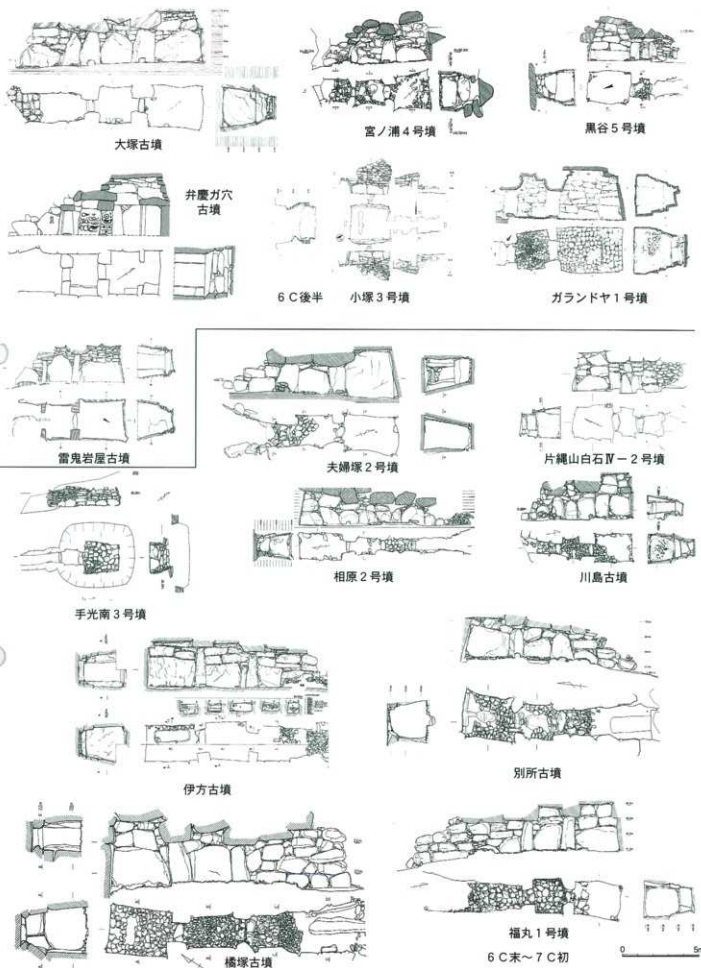


図5 複室構造横穴式石室3 (1/250)

山口南2号墳の1例のみでA類である。石室の特徴は、前代と同じであり、巨石墳化を呈する。

⑥筑後川中流北岸地区(G)

下瀬名子6号墳の1例のみでA類である。玄室の平面プランが胴張りで、石室の特徴は前代と変わらない。

⑦筑後川中流南岸地区(H)

益生田A-12号墳の1例のみでA類である。玄室の平面プランが胴張りで、石室の特徴は前代と変わらない。

⑧佐賀県東部地区(K)

12例あるが、B類が主体で、2例のみがA類である。このうち7例は東十郎古墳群に属し、全てB類である。

石室の特徴は、前代と同じであるが、腰石がやや大型化するものが多い。山浦1号墳は腰石の上に積み上げる石材が扁平な板石で他の古墳と異なっている。

⑨佐賀県中部地区(P)

2例あるが、いずれもB類である。石室の特徴は、前代と同じであるが、腰石がやや大型化する傾向にある。

⑩長崎県東南部(R)

長戸鬼塚古墳の1例のみで、A類である。石室の特徴は玄門、前門の袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。玄室の幅の2m強に対し長さが4.5mと同時代の他の古墳に比べ、細長の長方形プランを呈する。玄室天井も中央部が1段高くなるなど特殊である。

4. 各地の特徴

九州の6世紀代の横穴式石室については蔵富士寛により類型化がなされており(蔵富士2020他)、それによると筑後・北肥後系、筑前系、西北部九州系に分けられ、単室、複室構造にそれぞれ特徴があることが指摘されている。また、それぞれの系統の中にも地域的な特徴があることも指摘されている。

そこで前項で見てきたA類とB類の分布の変遷、石室の特徴を類例が増加し、各地区の特徴がみられる6世紀後半以降についてまとめてみると次のようになる。

まず、A類は筑後・北肥後系のみにもみられ、福岡県全域、佐賀県東部、熊本県北部、大分県中

心に分布し、福岡県では主体をなす地区が多い。6世紀後半～7世紀初頭には大鳴川流域、遠賀川上流、筑後川中流域、大牟田・みやま地区はA類のみである。また、宗像、周防灘沿岸北部地区はほとんどがA類である。

石室の特徴は袖石に柱状の立石を使用し腰石を設置する。6世紀後半～7世紀初頭に宗像地区では袖石を3～5段程度の石積みで造り、腰石が小ぶりのものが多いという特徴がある。また、筑後川中流域地区と八女地区では、玄室の平面プランが胴張りで、腰石がないものがほとんどとなる。

B類には筑前系、西北部九州系がある。筑前系は、福岡・糟屋地区、佐賀県東部地区に多く、その地区の主体となるが、そのみが分布する地区はなく、A類が混在している。また、周防灘沿岸地区にも少数が分布している。石室の特徴は袖石に柱状の立石を使用し、腰石を設置する。

西北部九州系は熊本県中南部と杵岐にみられる。石室の特徴は袖石に柱状の立石を使用し、玄室平面プランが方形のものは腰石を設置しない。白川流域地区にみられる。玄室平面プランが長方形のものは菊池川流域と杵岐にみられ、腰石を設置する。

7世紀前半は古墳の築造数の減少とともに資料数も減少する。

この時期にA類のみが分布するのが、遠賀川上流、周防灘沿岸北部、筑後川中流域、長崎県東南部の各地区で、各1基ずつである。A類が主体であるがごくわずかにB類が存在するのは、大鳴川流域地区である。B類が主体で少数のA類が存在するのは、福岡・糟屋地区、佐賀県東部地区である。B類のみが分布するのは、宗像地区、佐賀県中部地区である。

石室の特徴はA類では前代と変わらないが、地区ごとに細部に変化がみられる。B類は筑前系のみがみられ、こちらも特徴は前代と変わらない。宗像地区ではA類が見られなくなり、前代で特徴的だった石室も見られなくなる。

5. 杵岐島の首長墓の横穴式石室の源流

杵岐島で最初の首長墓である対馬塚古墳は6世紀第3四半期でも古い時期に位置付けられる。対馬塚古墳の石室の系譜が九州本土に求められるかみていきたい。

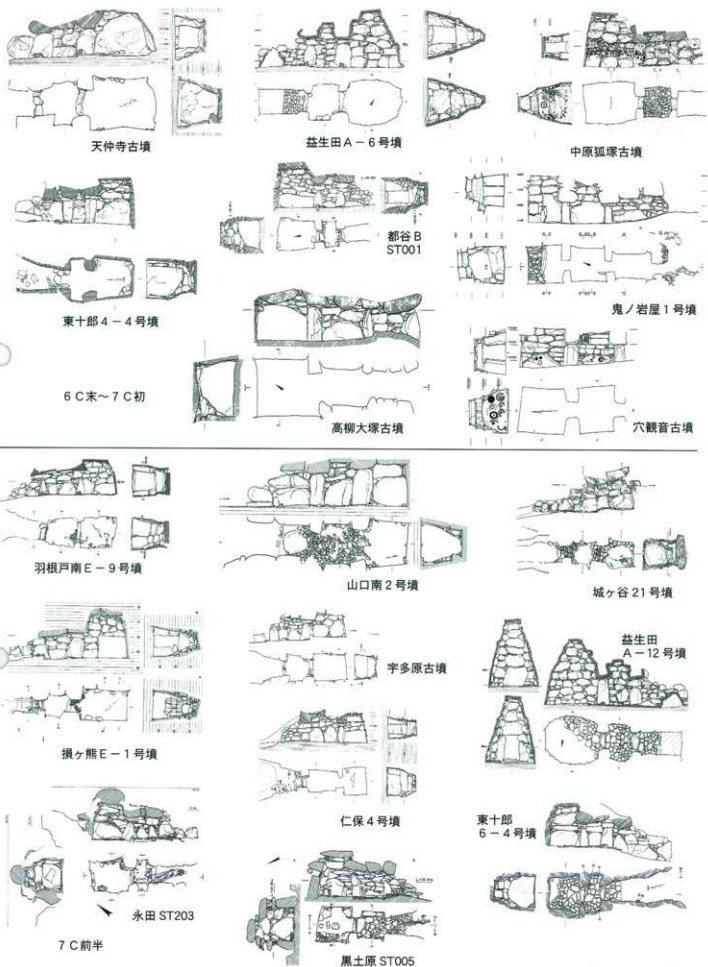


図6 複室構造横穴式石室4 (1/250)

まず、候補として考えられるのが6世紀前半から中頃の複室構造の横穴式石室である。北・中部九州でその時期の例は15例あるが、前室の天井形態がB類のものは、6世紀前半の鬼のいわや古墳、瀬上古墳、中頃の東光寺剣塚古墳、神松寺御陵古墳、袈裟尾高塚古墳、大野窟古墳である。

この中で、玄室の平面プランを見ると瀬上古墳、袈裟尾高塚古墳は方形に近く、両墳とも玄室に腰石を設置するが、前者は長方形の石材を側壁、奥壁に使用し、いわゆる石障に近い印象を受ける。腰石上の石積みも板石を使用しており、対馬塚古墳の石室とは全体の感じもかなり違う。

次に神松寺御陵古墳は玄室の平面プランは長方形であるが、腰石があまり大きくない。また、前室が小型であり明確ではない。前室は狭道拡大型(蔵富士2020)に属するとみられ、腰石上の石積みも板石を使用している。これも対馬塚古墳の石室とは直接つながらない。

東光寺剣塚古墳は玄室に大型の腰石を設置するが、その上部は側壁、奥壁、前壁ともに持ち送りがなく、ほぼ垂直に積み上げる。また、天井の高さも約3mで、玄室の長さ4mに比べ0.8弱となっている。前室も狭道拡大型で対馬塚古墳とは異なっている。

残るのは鬼のいわや古墳と大野窟古墳である。両墳の石室はよく似た特徴を持ち、前室も狭道分割型(蔵富士2020)であるが、玄室の長さ天井の高さの比をみると、鬼のいわや古墳が1.0(天井高4m/玄室長4m)、大野窟古墳が1.25(天井高6.48m/玄室長5.20m)である。対馬塚古墳は1.14(天井高4m/玄室長3.5m)で、わずかに大野窟古墳に近いが、腰石から上の持ち送りの傾斜をみると、鬼のいわや古墳はやや急に持ち送っているが、大野窟古墳は緩やかに持ち送っている。石室の断面形を見ても大野窟古墳の方が対馬塚古墳に近い。

このように比較してみると対馬塚古墳の石室に最も近いのは大野窟古墳ということになるが、異なる点もいくつかある。①大野窟古墳では、狭道の側壁を天井まで届く方形の切石3枚で構築するが、対馬塚古墳では大型の腰石を据え、その上に2~3段の石積みを行う。②玄室の腰石は、大野窟古墳では方形または長方形の切り石で、高さが楣石の下面とほぼ同じであるが、対馬塚古墳では

自然石に近いものを使用し、高さは楣石の下面と同じ~半分とばらつきがある。③前室の平面プランが、大野窟古墳では方形に近いが、対馬塚古墳では長さが幅の2.5倍を超える細長の長方形となっている。

現状では、大野窟古墳の石室の系譜が対馬塚古墳につながるのと確証は得られないので、その可能性を指摘するとともにどめておきたい(註11)。

6. 群集墳の地域性

6世紀後半~7世紀初頭には各系統の中にも地域的な特色がみられる。筑後・北肥後系が中心となる地域では、宗像地区や筑後川中流・八女地区で特徴のある石室が築造される。西北部九州系でも白川流域と杵岐島では石室形態が異なっている。

ところがこれらの系統が異なる石室は排他的な関係ではない。例えば筑前系が中心となる福岡・糟屋地区や佐賀県東部地区では少数ではあるが筑後・北肥後系石室が造られている。周防灘沿岸北部地区でも筑後・北肥後系が主体であるが、筑前系も見られる。さらに同じ筑後・北肥後系石室が主体の犬鳴川流域では、宗像型の特徴を持つ石室が造られている(註12)。

古墳群単位でみると6世紀後半の観音浦南古墳群(福岡・糟屋地区)、北垣古墳群(周防灘沿岸北部地区)、6世紀末~7世紀初頭の後田古墳群(福岡・糟屋地区)では同じ時期に筑前系と筑後・北肥後系石室が同時期に存在する。

このような状況は、古墳造営の主体者が石室の形態を比較的自由に選択できたことを示しているとみられる。これは石室構造を規定し、強い影響力を発揮する集団の存在は想定できない(蔵富士2020)か、あるいは古墳築造における石室形態の採用については、政治的規制の対象ではなかったかであろう。

ここで注目したいのは、周防灘沿岸地区における筑前系石室の存在である。複室構造の石室に限れば、この時期には速賀川上流域や犬鳴川流域には筑後・北肥後系のみがみられ、筑前系はみられない。周防灘沿岸地区では筑後・北肥後系が主体であるが、少数の筑前系がみられる。分布の面からみると筑前系の周防灘沿岸地区への広がりには海を介した関係がある可能性を指摘できるのでは

ないか。

これまでみてきた各地域の複室構造の横穴式石室の様相を老岐島と比べてみたい。まず、群集墳における石室の形態は、老岐島では複室構造が主体で石室の特徴も画一的である。一方、北・中部九州では各地域で特徴的な横穴式石室が造られるが、それらは排他的な分布状況ではなく、混在する状況がみられる。一部、遠賀川上流域では筑後・北肥後系の石室を造り、様相も似ており、筑後川中流・八女地区では玄室が胴張りプランの特徴的な石室を造っている。老岐島の石室の特徴は九州の他地域との類似性はみられないので、石室の構造において当該期を通じて老岐が他地域に影響を与えたり、受けたりすることはなく、独立性を保っていたといえる。

冒頭にも述べたが老岐島の特質としてこのような石室の斉一性が首長墓から群集墳にいたるまでみられるということがある。

これについても九州と比較してみると、周防灘沿岸北部地区では6世紀後半代に首長墓として筑後・北肥後系石室（前方部）の庄屋塚古墳、筑前系石室の準人塚古墳があり、首長墓系列で異なっている。下位の古墳も筑後・北肥後系が主体であるが、筑前系も混在する。筑後川中流南岸では群集墳については筑後・北肥後系で玄室が胴張りの古墳がほとんどであるが、6世紀後半の首長墓である重定古墳は玄室が長方形プランで腰石がある。八女地区でも首長墓系列の丸山塚古墳は筑前系で、童男山1号墳は筑後・北肥後系で、いずれも長方形プランで腰石がある。群集墳については筑後・北肥後系で玄室が胴張りの古墳がほとんどである。

このように当該期に九州では首長墓から下位の群集墳までが統一性の高い石室を造ってはいない。このことは、古墳は埋葬の施設であり、石室の形態は造墓主体（集団あるいは個人）の埋葬に対する思想に基づき決定され、自由に選択できたためと考えられる。

これに対し、老岐島では石室について観念的な一体性が表出されていたとみられ、それは多分に政治的な意味合いが含まれていたものとみられる。また、そのような状況が生まれる要因となったのは、老岐島の地政学的な位置と当時の国際状況であったことは広瀬和雄が指摘している（広瀬

2010）とおりである。

7. おわりに

老岐島で最初の首長墓である対馬塚古墳の石室についてその系譜が大野窟古墳に求められる可能性を指摘したが、大野窟古墳がある八代海沿岸の氷川流域は火君の本拠地とみられる地域であり、大野窟古墳の南1.5kmの位置にある野津古墳群は6世紀代の火君の墳墓群とみられる（三島1963）。対馬塚古墳と大野窟古墳の石室につながりがあるとすれば、磐井の乱後、老岐島へ移住したのは氷川流域の人々であり、火君の勢力が老岐島にまで及んでいた可能性も考えられる。

しかし、この点については古墳の石室からだけで結論が出せるものではない。土器やその他の出土品、生活遺構の分析など多方面からの検討をこななければならないと考える。

ただし、注目したいのは火君が海人の一族であったとみられる（西山2008）ことである。また、八代海沿岸で造られた石棺が福岡・佐賀県及び近畿地方で出土している（高木2008）こともこのことを裏付けているとみられる。磐井の乱後、火君が海上活動能力を生かし北部九州に勢力を伸ばしていったことは十分に考えられ、その結果として大宝2年（702）の筑前国嶋郡川辺里（現糸島市）の戸籍（正倉院文書）に嶋部の大領をはじめとして肥君（火君）一族の人名が記載されていると考えられる。

6世紀後半から7世紀前半にかけての老岐島では首長墓から群集墳にいたるまで斉一性の高い横穴式石室が採用されている。北・中部九州では造墓主体が比較的自由に石室の形態を選択できたことと比べると特殊な事象といえる。このことから老岐島において古墳は単なる埋葬の施設ではなく、政治的意味を持った構築物であり、集団的帰属意識を高揚させる観念装置だった（広瀬2010）とみられる。このように古墳の内部主体が政治的意味を持つに至った要因は、やはり老岐島の地理的な位置と中央政権の対朝鮮半島の対外関係における歴史的な動向に関係しているといえるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり下記の方々にご指導、ご教示、関連資料の提供を受けた。記して感謝申し上げます。(敬称略)

松見裕二(宍岐市教育委員会)、藏富士寛(福岡市埋蔵文化財課)、山崎純男、池田朋生(熊本県文化企画・世界遺産推進課)、美浦雄二(唐津市教育委員会)、平尾和久(糸島市教育委員会)

【註】

- 1 宍岐島の横穴式石室については田中聡一(田中2007)、広瀬和雄(広瀬2010)の研究成果がある。
- 2 対象資料については見落としもあると思われるが、傾向はつかめたと考えている。なお、見落とししている資料についてはご教示をお願いしたい。
- 3 原曲師の九州編年の日期不明。以下6世紀中期はⅡA期、6世紀後半はⅢB期、6世紀末～7世紀初葉はⅣA期、7世紀前半はⅣB期相当(舟山1991)として記述する。
- 4 田代太田古墳は三冢構造であるが、築造当初は複室構造で、のちに後室を改造し一室を設け「壘構造」となったと考えられている(吉村2000)ため、本稿では複室構造の石室として取り扱う。
- 5 雑石については津曲大祐が6類に分類しているが、片側の袖部構築法が違う事例が多く(津曲2004)、立柱石を使用しているか否かで区分しておく。
- 6 舟山大古墳の石室は相石と前室の天井は同じ高さであるが、後室の天井が1段下がる特殊な形態である。今回は正確に記しておく。
- 7 小嶋篤は別張りの石室を「筑後型」と呼称し、石室の特徴を整理している。(小嶋2020)
- 8 耳納山地の北麓と南麓で、別張りの石室の特徴の違いがあることが指摘されている。(神保2000)
- 9 前代の熊倉古墳の石室とともに「八女型」(小嶋2009・2020)とされる石室である。
- 10 夫婦塚2号墳は後室の途中の片側だけが広がる特殊なものであるが、複室構造に含めた。
- 11 ①、②については、次期の双穴古墳において大野原古墳と同様の形態となる。ただし、双穴古墳には巨石構築の傾向がみられる。
- 12 筑前系と筑後・北肥後系の各地域での分布のあり方は人田文明が想定した(太田2011)仮説型にあたるが、同僚藤治平北部地区の権相は現在に該当するかもしれない。

【引用・参考文献】

- 太田宏明2011「考古資料にみられる分布世界規模の様相—横穴式石室を資料として—」『考古学研究』第57巻4号
- 小田富士雄2012「古墳時代の北部九州と奄美列島・沖縄」『巨石古墳の時代—東アジアにおける壘穴古墳群の位置—』
- 藏富士寛2007「北部九州の埋葬施設と石室構造」『研究集會—近畿の横穴式石室』
- 藏富士寛2011「玄界灘沿岸」『第14回九州筑方後方墳研究—会発表要覧』
- 藏富士寛2020「複室構造横穴式石室—九州地域の横穴式石室に対する構造的理解に向けて—」『横穴式石室の研究』
- 小嶋篤2009「第5章 1節 長谷の横穴式石室の検討」『長谷の横穴式石室—若杉今庄

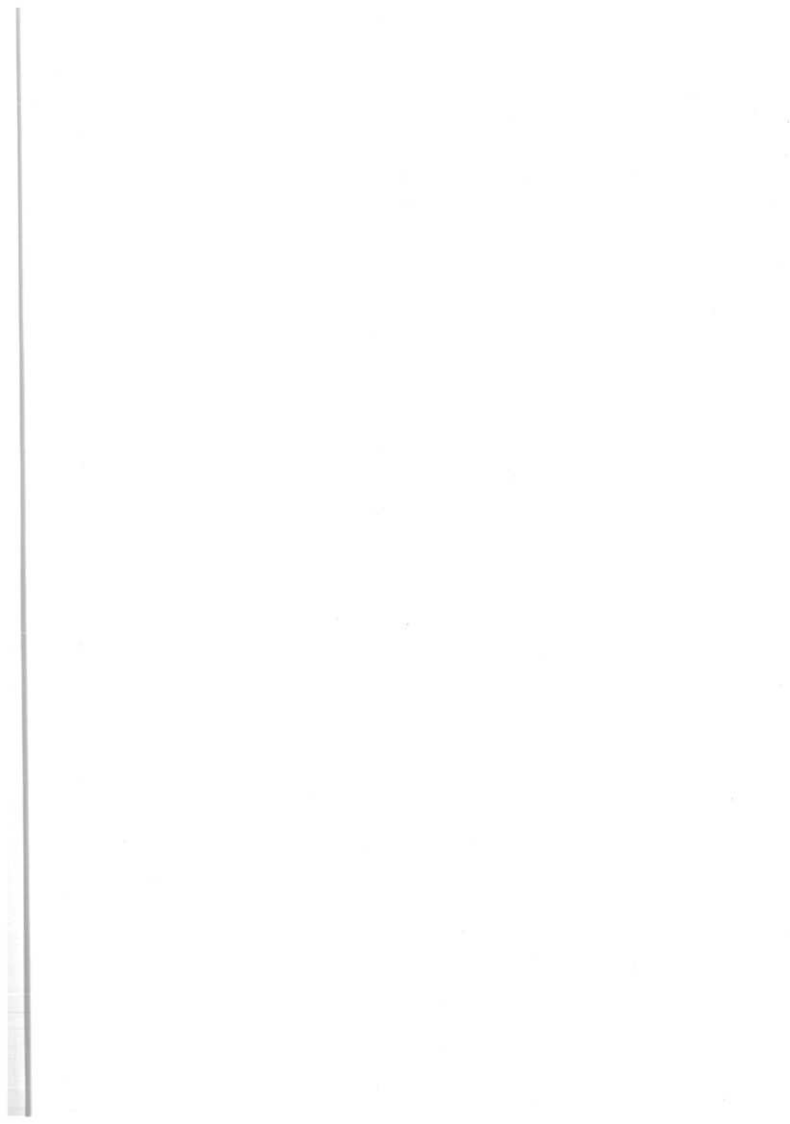
【著者】

- 小嶋篤2020「筑後の横穴式石室—筑後型石室と八女型石室—」『福岡大学考古学論叢』第3—武木統一先牛遺跡記念—
- 下京幸松2006「四日本国の終末期古墳」
- 神保公久2000「註。1次調査—1号墳の調査—」『大谷古墳群』
- 藏富士寛2008「石室から見た古墳時代の九州」『火の君、海を征く!—古墳からみたヤマトと八代—』
- 田中聡一2007「宍岐島の古墳について」『西海考古』7
- 田中聡一2008『宍岐島の古墳—宍岐島を代表する大型古墳—』
- 津曲大祐2004「博多湾沿岸地域の石室構造技術—後室古墳を中心に—」『福岡大学考古学論叢—小田富士雄先生追悼記念—』
- 西山由美子2008『古墳からみた火の君と八代』『火の君、海を征く!—古墳からみたヤマトと八代—』
- 広瀬和雄2010「宍岐島の後・終末期古墳の歴史的背景—6・7世紀の外交と「国型」—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集
- 舟山貞一1991「3墳並部の編年—九州」『古墳時代の研究—6—土器と銅器』
- 三島裕1983「熊本県八代郡野原古墳」『九州考古学』19
- 吉村精徳2000「北部九州における三冢構造横穴式石室の概観」『古文化論叢』第45集

※本稿で使用した石室実測図は各古墳の報告書等から転載したが、紙幅の都合で図面が掲載された書籍名を削棄させて頂いた。ご寛恕願いたい。









糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第15号

発行日 令和2年3月31日
発行 糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916
印刷 (株)ケンホクプリント
〒819-1631
福岡県糸島市二丈福井2620-1
TEL (092) 326-5940